

嗜虐の艦隊 弐



DOJIN  
R18  
成人向け  
18歳未満の  
購入・閲覧禁止

# 嗜虐の艦隊(弐)

桐嶋誠一郎



伏龍齋

私と関わり、豊かな刺激と閃きを与えてくれた全ての人に。  
また、創作の機会を与えてくださった「艦これ」運営鎮守府、  
素晴らしい絵で作品に命を吹き込んでくださった高鰻先生、  
そして、いつも新たなインスピレーションを与えてくれるMに。



## 第七話 倒錯した善意

野分はいい便器だ。

「おっ、お おっ、お ごっ、お っ、お おっ…!♥」

まずもって、この鳴き声が良い。とても無様な声だ。狼に喉笛を噛み千切られた獣は、きっとこんな断末魔を漏らすのだろう。必死に悲鳴をあげようとしても、声帯が破壊されているために許されず、間抜けな鳴き声と共に死んでいくのだ。

そういう声をあげているという自覚は、野分にもあるだろう。無様で惨めな自分の姿を、自覚しているだろう。だが一方で、彼女は明らかに興奮している。自分がいかに惨めな存在か、いかに下品で汚らしい便器であるか、それを自覚する事そのものが、彼女に興奮を提供している。

「お おっ、お ぼっ、お っ、ごっ、お ぼおっ、お っ…!♥」

だからこそ、野分は必要以上に声をあげる。

確かに、野分は苦しいのだろう。ベッドに腰掛ける霧島、その傍のフローリングに膝立ちの恰好となり、口を開けてちんぼを咥え、頭を両手で掴まれる。そして、霧島が気持ちよくなる、ただその為だけに、頭を動かされる。野分が苦しいか、苦しくないか、そんな些細な話には構わず、ただただ、喉の奥までちんぼを突っ込み、食道の粘膜に擦り付け、野分の食道オナホールを抉っていく。その苦しさに呻き声をあげてしまうのは、当然の事だ。

だが、野分のその苦悶の唸り声は、苦しいから本能的に漏れている…ただそれだけのものではない。その獣の声を聞いて、声を出した本人が興奮する。そういう倒錯した性癖のために、わざと、オーバーに発せられているものだ。

「うふふ…♥ 三榛ったら、すーごい声、出しちゃって…♥ 喉擦られるの、そんなに気持ちいいんですか?♥」

三榛と呼ばれた野分の身体が、ビクっ、と明らかに震えた。その様子に、霧島は喉を鳴らして愉悦を零す。このマゾ便器は、自らが考えた名前を、他ならぬ霧島に呼ばれると、それだけで悦ぶ。名前を呼ばれる、その程度の事で、しかし、敏感に反応するのだ。

霧島にしてみれば、全裸になって自らのちんぼに吸い付くこのオナホールは、素晴らしいものだった。まずもって、霧島の言う事なら、何でも聞く。霧島の命令がどんなに屈辱的で、また厳しい苦痛を伴うものであったとしても、むしろ、野分はその屈辱と苦痛を歓喜に変えていた。そして、霧島を喜ばせる、無様で惨めな唸り声をあげてくれる。今のようだ。

野分は今、歓喜をもって霧島のちんぽに使われている。自分の口を…本来ならば、息をし、またものを食べ、飲むための器官を、オナホールとして提供している。彼女は、その事実に興奮している。そして、霧島から与えられる苦しみに、興奮している。

野分は、霧島から与えられる快樂に興奮しているのではない。

霧島から与えられる苦悶と屈辱に、興奮しているのだ。

「そーですよね…♥ 三榛は、キモチイインですよ？♥ おちんぼ、喉の奥まで突っ込まれて…♥ 食道ごりゅごりゅ抉られて…♥ 苦しくて、吐きそう、それに息もろくにできなくて、頭フラフラで…うふふっ、そういうのがキモチイインですよ、三榛は？♥」

霧島の言葉は全て、真実だった。三榛と呼ばれて敏感に反応する野分は、今、両手を自らの股間に移動させている。両の指で、自らの秘部を弄くり回している。最初のあの夜と同じだ。大好きな霧島に与えられる痛み、自らのあげる無様な呻き声、そして、オナホールに墮した自分自身の惨めな姿—そういったもの全てが、彼女を興奮させていた。

本当に、霧島の言う通りなのだ。キスして、抱きしめて、優しく愛撫して…そういうようなセックスでは、野分は満足できないだろう。徹底的に辱められ、人権を踏みにじるように蹂躪されなければ、彼女は満足できないのだ。そうやって凌辱されている自分の、憐憫の情すら誘えないような姿に、興奮するのだ。酸欠でフラフラと回る頭が、余計にその確信を強くしている。

霧島にはその気持ち、本当によく判る。自分自身もまた、そういう性癖を持つが故にである。

「ぶはあっ！♥ お、お`え`っ、え`え`っ…！♥ はあーっ、はあーっ、はあーっ、はあーっ…！♥」

オナホールを持ち上げてちんぽを抜くように、野分の頭を持ち上げ、そして離す霧島。ちんぽが抜けた事により、今まで貯め込んだ嘔吐感を解放しそうになる野分だが、なんとか踏みとどまると、口腔内にたまったえずき汁だけをフローリングにぶちまけ、続いて肩で息を始める。食道をオナホールとして使われている間は、殆ど呼吸できないのだ。当然と言えば当然だった。

「みーはーるー…？♥」

「は、はひっ、ご、ごめんなひゃい…♥ ごめんなしゃい、ごめんなひゃい…♥」

だが、そのフローリングにぶちまけたえずき汁は、飛沫が霧島の足にかかってしまっていた。満面の笑みを浮かべながら、しかし、ねっとりまとわりつくよ

うな声で自らの名を呼ばれた野分は、それだけで何が起きたのか気付くと、よろよろと四つん這いになり、霧島の脚を舐め始める。

卑しい便器でしかない自分が、愛しいご主人様につけてしまった汚らしい印。それを舐め取って、ご主人様に詫びようというのだ。しかし、霧島の足にかかったのは、吐き出したえずき汁の塊そのものではなく、フローリングにぶつかって飛び散った飛沫でしかない。度重なる窒息責めで、視界がぐるぐると回るようにすら感じられる野分には、透明で、また細かい液体が霧島の何処についたのかなど、見分ける事は出来ない。

結果として、野分は何度も何度も謝りながら、霧島の足の甲に舌を伸ばした。太腿を舐めるよりも、脛を舐めるよりも、足を舐める方が、無様だ。より無様な姿を見せた方が、ご主人様は興奮してくれるだろうし、満足してくれるだろう。満足してくれたなら、きっと、許してくれるだろう—そういう意図があったようだ。

酸欠で頭の回っていない野分が、そこまで細かい事を考えられるとは思えない。恐らくそれは、彼女の本能的な部分が命じたものであった。肉便器としての、本能である。

「いぎっ…!?♥」

舌が足の甲を這い、足の指に近付こうとしたところで、しかし、突然、足舐め奉仕は中断させられた。野分の頭に鋭い痛みが走り、自らの意思に反して、顔が浮いていく。そのショートに切り揃えた髪を、霧島が鷲掴みにして引っ張っているのだと、数秒遅れで気付いた。

「足を舐めるのもいいですけど、ね?♥ 私、まだそのお口に用があるんですよ?♥ まだ、イってないんですから、ね?♥ 足なんて舐められたら、ばっちくてもう、おちんぼ突っ込めませんよ…ふふっ♥」

持ち上げた野分の頭に、霧島がずい顔と顔を近付ける。彼女の顔は、嗤っていた。笑うと言うよりは、嗤っていたのである。にたあ…♥ と、霧島が口角を吊り上げて。その笑顔は、木曾が浮かべるそれに、非常によく似ていた。野分もまた、にへら、と、力なく…しかし、淫猥な笑みを浮かべる。霧島は木曾に、そして、野分は霧島に、似ていた。

「じゃあ、お仕置代わりに、もっと苦しくしてあげましょうか?♥ 嬉しいでしょう?♥ 三棹は苦しい方が、キモチイイですもんね?♥ もっと、キモチよくしてあげますよ♥ 三棹の事、もっともっと、壊してあげます…♥」

「はひっ、はひっ…!♥ 壊してくだひゃいっ…♥ 殺して…♥ 殺して、殺してくださいっ…!♥」

壊してあげる、そう言っただけだというのに。野分の方は、殺してとまで懇願し始める。確かに、イラマチオは、やり過ぎれば死ぬだろう。食道までちんぼを挿入し、気道を塞いだままにしておけば、窒息死する事も充分にあり得る。

壊す、という言葉から、その光景を想像したのだろうか…殺して、殺して、と何度も懇願する野分は、いよいよ自らの秘部を勢いよくかき混ぜ、ぐちゃぐちゃといやらしい音を響かせる。

「さて、と…♥」

オナニーをやめない野分の身体を持ち上げ、ベッドの上へ仰向けに転がすと、ベッドの端から頭だけを出す。霧島はその繊細な指で、しかし無造作にいくつと野分の顎を引くと、その唇に、がちがちに勃起したふたなりおちんぼを擦り付けた。自らのカウパー腺液と、野分のえづき汁でどろどろになったそれは、蛍光灯の明かりを受け、てらてらと光っている。

「んお お っ…!♥ お 、ごっ、お 、お お っ…!♥」

そのちんぼが、ずぶぶぶ…♥ と、野分の口腔内へねじ込まれていく。霧島が腰を進めるたび、ちんぼも同じだけ前進し、野分の口の中へ呑み込まれていく。やがて龟头が喉ちんこに当たり、ちんぼと喉ちんこの兜合わせと呼ぶには惨い勢いで喉ちんこを潰し、蹂躪しながら、喉を越えて食道へと入っていく。

この姿勢であれば、口から食道までが一直線になる。普段のイラマチオにおいては、そうではない。人間が前を向いている時、口と食道の角度はほとんど直角に近い。口から入ったちんぼは、ある程度曲がって食道へ入らねばならない。日本人のちんぼは硬いというのもあり、奥までねじ込むのは困難がある。だが、今野分にさせている姿勢ならば、そうではない。

「うふふっ…♥ やっぱりこの姿勢、いいですね…♥ 私のちんぼが、三棒のお口、犯してるの…♥ はっきり、見えますよ…♥」

霧島は今まで、木曾に犯されるばかりだった。野分と出会うまで、犯す側になった事は一度もないのだ。だから、この姿勢で行うイラマチオの素晴らしい点に気付かなかったし、判らなかつた。だが今ならば、はっきりと理解できる。

霧島のたおやかな指が、野分の喉仏をつつ…♥ となぞる。そこは明らかに、盛り上がっていた。皮膚と薄い肉越しに、自らのちんぼを感じる。そう、人間の喉というものは、ちんぼを食道まで突き入れると膨らむのだ。食道と喉は柔軟にできており、硬いものをあまり噛まずに呑み込んで、食道と喉が膨らみ、それを胃まで通してくれる。同様に…ちんぼという、熱く、硬く、そして大きな異物を突っ込まれると、膨らんでそれを受け入れてくれるのだ。

「お 、お お っ、お っ、お っ、お お お お お っ…♥」



霧島は、ちんぽを根元まで突き入れた状態で腰を固定し、そのまま、感慨深げに何度も喉仏をなぞり、撫でる。彼女の玉袋に視界を塞がれそうになっている野分はと言えば、苦悶の中に恍惚とした成分を混ぜた、複雑な表情を浮かべていた。

だが、その表情は霧島には見えない。霧島にとって、野分がどう感じているか、どんな表情を浮かべているか、そんな事は、少なくとも今は、重要ではなかった。

自分のちんぽが、野分の食道にまで入り込んでいる。彼女の呼吸を阻害し、食道をみちみちと拡張している。食道の粘膜が、ちんぽを吐き出そうと顫動している。そういった事実が、ただちんぽから与えられる快楽だけでなく…目に入ってくる映像と、指先で感じる触覚で、理解できる事。今、自分は野分を使っているのだと、野分を支配しているのだと、実感できる事。そこから生まれる、優越感と快感に浸る事。それが、今の霧島にとって、何よりも重要だった。

「ぶはっ！♥ はあっ、はあっ、はあっ、んおおっ…！♥」

そろそろ危ないか。その点に思い至った霧島は、野分の膨らんだ喉仏に指を当てたまま、ずりちんぽを抜く。すると、ちんぽが食道の粘膜を擦る感覚と同時に、野分の喉肉越しに、自らのちんぽが動く様子が感じられる。また、視覚的にも、膨らんでいた喉仏がしばむのが見えた。

その経験に、霧島がくくっと喉を鳴らす。必死に呼吸する野分に構わず、すぐにちんぽをもう一度突き入れると、喉が膨らみ、ぐぐっと霧島の指が押される。同時に、ちんぽが食道を抉る感覚が、指先に伝わってくる。

「…♥」

その時、霧島の頭をよぎったものがあつた。昔、インターネットで見たプレイ。それを試してみようと、喉仏を触っていた手を、喉輪のような形で首筋にまわりつかせる。片手で、野分の首を締めようとしているような形だ。そのまま、軽く手に力を入れた状態で、腰を前後に動かしてみる。

「あ、これ、凄い…♥ すっごい、気持ちいい…♥」

思わず霧島が、声を漏らす。野分の屈辱感を煽るための、言葉責めの台詞ではない。あまりの気持ちよさと興奮に、我知らず出てしまった独り言だ。

男がオナホールでオナニーする時、ちんぽを咥え込ませたオナホールを優しく握るか、強く握るかで、感触が変わる。オナホールの握り方で、締め付けを調整できるのだ。原理的には、同じ事である。野分の食道オナホールを、喉仏を潰すような形で首を絞める要領で握れば、今までとは違う快感が得られる。

「すごいっ、凄いですよっ、三棒っ♥ 気持ちいいっ♥ とっても、とおつても、気持ちいいですよっ♥ 三棒のお口便器、とっても気持ちいいのっ♥ こんなのっ、すぐイっちゃうっ♥」

霧島の興奮は、止まらない。最初は片手だったのが両手になり、ぐいと締め付けたかと思えば緩め、また締め付けては緩める。一方で、ゆっくりだった腰の振りはすぐに高速となり、ぐっぽ、ぐっぽ♡ といやらしい音を立てながらちんぽを食道に出し入れし、そのたび、彼女の玉袋が野分の顔を叩く。

今まで、野分の事はオナホールとして扱ってきたつもりだった。恋人どころか、人間ですらなく、ただの性処理道具として、使ってきたつもりだった。だが、今ほどに、野分をオナホールとして扱っている実感を得た事はなかった。最高の気分だった。

野分という人間は今、食道にしかその存在意義を認められていない。あまりの苦しみと快感に自らを慰める事すらできずただばたついている手足や、本来ちんぽを受け入れるべき秘部、小さい乳房…そのどれもが、ただのオプションであり、本質的な価値を持たない。普段イラマチオする時は、その取っ手として重要な頭すら、今は価値を持っていない。

野分の身体の中で価値があるのは、今は、食道とそれを囲む肉と皮膚、それだけだ。霧島には今、その部分しか求められていないし、また、彼女自身、そこしか見えていない。自らの両手で絞められ、と思えば緩み、一方で、ちんぽに中を挿れられるたび、膨らんではしばみ、膨らんでは萎むその喉仏の部分しか、見えていないのだ。

「おっ、おっ、うっ、おっ、えっ、えっ、げっ、おっ、げっ、っ！♡」

先程までは、あれほど霧島を興奮させていたその呻き声すら、最早、霧島の耳には届いていない。ただオナホールを挿れ、絞め、ちんぽを気持ちよくする。射精に向けて、オナニーする。それ以外、霧島の頭には何もなかった。霧島は、ただただ、オナニーに駆り立てられていた。

「ああ、駄目、いきそ…♡ イっちゃう…♡ イく、イく、イ…んっ…！♡」

やがて、小刻みに、しかし速い腰遣いは霧島を絶頂に導いた。根元までちんぽを突き入れて固定し、一方で、思い切り、それこそ絞め殺す勢いで、力の限り締め上げる。やがて鈴口から精液が漏れ出し、びゅううう、と勢いよく食道へ排泄されていく。

「おっ、ごっ、えっ、えっ…！♡ うっ、おっ、ごっ、おっ、おっ、っ…！！♡♡」

口を閉じる事もできず、精液を吐き出す事も許されない苦悶に、しかし破滅的な快楽を感じながらあげる、獣のような唸り声。それが霧島の耳に聞こえてきたのは、ほとんど射精を終え、その余韻も消え始めた時期だった。

霧島と野分が出会ってから、一週間が経った。霧島は再び、陸戦隊開隊の為の、

忙しい日々に戻っていた。今彼女は、陸戦隊司令部としてあてがわれた建物、その一室で、天龍と向き合っている。机を挟んで一対一だ。

目下の彼女の仕事は、自らの部下となる者達がどのような人物か、見極める事であった。そのために、入隊予定の艦娘との面接に臨んでいた。

無論、艦娘として軍人であるから、人事を発令し、命令に従って機械的に動かしてもそこまで問題は無い。とは言え、軍隊というのは、それだけで円滑に動いてくれるほど甘い組織ではない。

結局は、軍隊もまた、人間の組織である。上司と部下、また同僚と同僚が互いの人柄を把握し、戦友と思うほどに信頼していなければ、その活動はぎこちなくなる。ちょうど、油の切れた機械のようなものになってしまうのだ。

まして、艦娘陸戦隊は普通の軍隊組織とはかなり違う。まずもって、人数が少ない。ブインの場合、司令官である霧島を含めて大体、四十人ほどの組織になる予定だ。学校の一学級程度の人数である。

その上、階級の上下がほとんどない。普通は、司令官が一番偉く、末端の兵隊は低い。ところが、艦娘というのは軍艦である一方艦長でもあるため、原則、全員が大佐である。駆逐艦のような艦艇でも、中佐だ。故に、司令官から末端の兵隊まで、階級的にはほとんど横並びなのである。

勿論、横並びと言っても、上下関係がない訳ではない。軍隊では、階級が同じ場合、先にその地位になった者が偉い。同じ大佐でも、先に大佐となった者は、後から大佐に任じられた者より偉いのである。

とは言え、ならばそれだけで圧倒的な差があるかと言えば、そういう訳でもない。階級を理由に強圧的な態度を取れば、それは大きな摩擦を生むだろう…その程度の差でしかない。

また、艦娘は原則として階級が横並びであるから、先任順を気にすると効率的な艦隊編成が困難になってしまう。その為、現代の日本国海軍では、この順番は軽視される傾向にある。事実、霧島は、この陸戦隊で最先任の大佐という訳ではないのである。

しかも、だ。大佐と言えば、戦前でも運転手付きの車で街中を移動しているような身分である。そもその問題として、艦娘というのは、「オイそこの少尉」と呼びつけて顎で使えるような類の人種ではないのだ。

ただでさえ少人数であり、霧島の方が圧倒的に偉いから階級の差で押さえつける…という訳にもいかない。自然、一人一人を丁寧に扱う必要が出てくる。加えて、霧島はこのブインにおいては部外者である。

故に、彼女は陸戦隊に入る者全員と面接するという選択肢を選んだのである。

「では、よろしくお願ひしますね」

「おうっ！ 今から腕が鳴るよ、楽しみにしてるぜ」

面接が終わり、意気揚々という言葉を描いて描いたよう天龍が退出していった。

天龍は一般的に、好戦的な性格の個体が多い。戦闘においては勇者として先陣を切る、水雷屋タイプだ。指揮官としても有能な個体が多いのだが、いかんせん元になった艦が最初期の軽巡であるため、多くの鎮守府においては遠征要員として運用されており、不満を溜めている事が多く—このブインでも、そうだったらしい。彼女は、陸戦隊への参加を自ら希望、いや、熱望していた。その熱意は、面接でも嫌と言うほど伝わってきた。結局、水雷屋は、危険な前線任務を楽しめるぐらいの勇猛さを持っているものなのだ。

だからこそ、海の上ではなくとも、前線で戦えるならば喜んで陸戦隊に参加すると、天龍はそう語った。前線勤務こそ、自分の望む道であると。その性格は、陸軍で言えば騎兵将校に近いものだと言えた。霧島がその話をし、また、一種の軽騎兵である搜索隊の指揮を執ってほしいと語った時、天龍は目を輝かせていた。

「ふうっ…」

天龍が部屋から去った直後、霧島は目を閉じ、大きな溜息と共に背もたれへ体重を預けた。直後、疲れた、という吐息が漏れる。

別に、天龍が手のかかる子供だったから、それで疲れたという話ではない。天龍は勇猛な軍人であり、熟練の艦長である。面接そのものも円滑に、かつ好意的に話が進んだから、むしろ楽しい経験であった。

だが実を言えば、霧島はこの一日、朝からこの夕方まで、ずっと面接のし通しだったのである。疲れ果てて溜息を吐くその姿を誰かに見られたとして、その者も、彼女を咎める気にはならなかっただろう。

この全員の面接というのは、なかなか手間のかかる、大掛かりな仕事であった。

霧島はまず、約四十人もの陸戦隊入隊予定者、その全員の資料の閲覧させてくれるよう、戦務参謀の香取に求めた。それ自体は二つ返事で了承されたが、実際にそれを参照するのは、それだけでなかなか大変な作業であった。

元々陸戦隊総監をやっていた霧島であるから、各艦の特徴ぐらゐは把握している。が、各艦の特徴と、各個体の特徴は別である。それは、霧島を見れば判る。

霧島はどの個体も概ね知的で落ち着いているが、だからと言って全員の性格や経歴が全く同じという訳ではない。多くの鎮守府において、霧島は主力高速戦艦として前線で実戦経験を積んでいるが、大湊で生まれた霧島之白はそうでは

ない。彼女は大湊でのキャリアを殆ど参謀として過ごしているし、その後は軍令部で陸戦隊總監をしていた。同じクローン人間であっても、経歴や、それに伴う周囲の環境は違うのである。故に、趣味嗜好や性格も、個々に変わって来う。霧島之白は相当のマゾだが、このブインに元からいるという霧島—どうやら二人いるらしい—は、同じマゾかもしれないし、逆にサドかもしれない。それは当然の話なのである。

だから、各個人の経歴を参照するのは、必要な事だった。資料は、ただの無味乾燥な経歴の羅列だけではなかった。事細かではないが、しかし、趣味や交友関係についての記載もある。一枚一枚、そういう資料を細かく見ていったのである。当然、時間が必要だった。

その上で面接をする訳だが、一人三十分としても、全部で二十時間はかかる計算である。一日八時間の勤務時間全てを面接に充てたとしても、それでも三日はかかる。なかなか骨が折れる仕事であった。

だが、収穫は充分過ぎるほどにあった。まだ最後の一人まで面接を終えた訳ではないが、それでも、この手段を選んでよかったと、霧島は満足していた。

資料を確認し、また話す事で、その者を知り、また打ち解ける事ができる。部下がどういう人間かを把握し、更に信頼関係を築いていくというのは、組織を動かしていく上で重要だ。

面接を進めていく中で、霧島がMI作戦の英雄であるという事実は、やはり彼女にとって有利に働いた。艦娘は、生まれつきの軍人である。軍人は、英雄に羨望の眼差しを送るものなのだ。

「失礼します」

ノックと共に、扉の向こうから声がする。霧島がその声を聞き間違える筈もない。「どうぞ」という彼女の返答と共に入ってきた野分もまた、霧島にそういう眼差しを送る人物であった。

「お疲れ様です。今日の面接は、これで終わりです」

あの居酒屋に飲みに行った夜以来、野分は霧島に、べったりとくっついていた。

霧島は、最初に出会ったその時から、野分を自分のモノにしようと決心していた。故に、居酒屋で誘惑し、部屋に連れ込み…徹底的に、犯した。まるで自分が、ご主人様に一木曾になったかというほどだった。それは、霧島にとっては初めての経験であり、合わせて満足できるものであったが、同時に、野分にとっても初めての経験であったようだ。そして、霧島との関係は、彼女の心の隙間を埋めてくれるものでもあったらしい。

自分と同じだ、と霧島は思う。霧島自身、肉便器願望を持ち、悶々とした日々

を過ごしていた。そこに、心の隙間というものは間違いなくあった。そこに木曾が現れ、容赦なく彼女を犯した。霧島の心の隙間を、埋めてくれた。だからこそ霧島は木曾に心酔し、仕えている。

野分も同じなのだろう。男役としか見て貰えない、本当の自分を誰も見てくれない…そういう心の隙間が、彼女にはあったのだ。だからこそ野分は、男役以外の存在として自分を見てくれる誰かを探していた。それが、霧島だったのだ。

「ありがとうございます。もう五時過ぎてますね…今日のお仕事は終わりにしますね」

それ故にだろう。霧島が木曾に心酔したように、野分もまた、霧島に傾倒している。霧島を、崇拜している。

あの夜、ベッドの上で、野分は気を失うように寝た。事実、あれは気絶だったろう。何度も何度も首を絞められ、またイラマチオで窒息させられ、まともな状況ではなかった。

ところが朝になると、台所で朝食を作っていたのである。いい匂いに誘われて目を覚ました霧島は、ダイニングキッチンの光景に驚いた。自分以外が、しかし自分の部屋で、自分のために料理を作っている。それは、霧島の人生において初めての体験であった。

朝食を共に摂る中で、野分は言った。霧島のお手伝いをさせて欲しい、と。その彼女の願いは、公私を問わないものであった。昼、霧島の執務中は、これを手伝わせて欲しいし、夜は、「使って」欲しいと、野分は願ったのである。

この願いは、霧島としても、渡りに船であった。特に昼の間助手になりたいという願いは、諸手を挙げて歓迎すべきものだった。四十人からの人間を一人で指揮するというのは、なかなか大変なものである。自分の仕事を半分以上任せられる副司令官や参謀…とまでは言うとは贅沢だが、しかし仕事を手伝ってくれる助手が欲しいというの、考えているところであった。

そこに野分が手を挙げてくれたのである。渡りに船以外、表現の仕様が無い。無論、野分は輜重兵中隊に配属される予定である。開隊後は、彼女にも自分の仕事ができる訳で、そうなるからも野分に助手を頼めるかどうかは判らない。が、それまでだけであっても、仕事を手伝ってくれるのは助かる。

それに、夜の方も、ありがたい話だった。勿論、毎日毎日、プライベートな時間に付きまといられるのは嫌だ。野分を「落とした」のは霧島の意思だが、それは恋人として、伴侶としてではなく、肉便器としてである。野分は、霧島が使いたい時に使う道具であり、所有物でしかないのだ。仕事が終わって部屋に帰った瞬間から、プライバシーもなく、寝るまでひたすらまとわりつかれるというのは、

願い下げである。

だが、野分が求めたのは、そういう事ではない。昼は助手として働き、夜は、霧島の気が向いたら呼び出して欲しいという、謙虚なものだったのである。これは、木曾と霧島の関係にも近いものだった。

結果として、この一週間というもの、毎日のように野分を呼び出している。霧島にとって、野分はそれだけお気に入りの玩具であった。しばらくすれば、その熱も収まるだろう。そうなれば、呼び出す頻度も減るだろう。だが今は、野分に夢中であった。

そう言えば、ここのところ木曾は、霧島を呼んでくれない。野分に出会ったあの日の翌日、しばらく夜は用事があるから来なくていいという連絡があり、それ以降、一度も木曾の部屋には行っていない。

毎晩のように野分を呼び出せているのは、その辺の事情もあるが—ともあれ、木曾に呼び出されなくても、霧島は寂しくない。半分は、ご主人様を愛し、また信用しているからである。霧島は木曾を敬愛しているし、その夜の用事とやらが終わればまた呼んでくれるだろう、と信じている。一方で、野分という便利な便器を手に入れたから、一人の寂しさを紛らわせる事が可能になっているというのも、事実であった。

何にせよ、霧島は、野分という存在に限りなく満足していた。公務の間は、霧島の負担を軽減するように動いてくれる。夜になれば、都合のいい時に呼び出して、性欲とストレスを発散するための道具として使える。文句など、一つもなかった。

「そうですか。判りました…お疲れ様です、之白♪」

普段と変わらない、涼やかで、一種男前とも言える紳士的な顔から一転して、柔らかな笑みを零す野分。仕事用の、いわば外向けの自分から、プライベートな自分に切り替えたのだ。親友の嵐が見れば、驚いたかもしれない。

元々、野分はオンオフの切り替えが苦手な性質である。常にどこか緊張しており、リラックスするとか、まして、誰かと対等に話す、という事はできない。上役や他人に対する態度か、舞風に対してするような、妹を世話するような態度、そのどちらか以外の姿勢をとるのは、野分にとって極めて難しい事であった。

彼女がのわっちと呼ばれて困ったような表情を浮かべるのは、それが嫌だからではない。あだ名で呼ばれる事自体は、むしろ、嬉しくすらある。だが、そうやって打ち解けた態度で他人に接するという事が、できないのだ。相手が打ち解けてくれているのに、こちらはできない。そのギャップに、彼女は困るのである。

そんな野分も、唯一、嵐の前でだけはリラックスできた。精神的な緊張を解き、

寛いで接する事ができた。彼女の前でだけは、対等な一人の友人として、素の自分を出す事ができていた。

しかし今は、霧島の前でも、自分をさらけ出す事ができるようになった。柔らかい表情を浮かべ、優しく微笑む事ができた。

「…みはる……」

目を閉じたままの霧島が、机を軽く蹴る。彼女の座る椅子はキャスターが付いており、また机が重い作りだった事もあり、霧島の身体は机から離れた。そのまま、両手を広げる。

はっきり言って、霧島は野分を人間扱いしていない。本人が自覚しているかどうかは別として、霧島にとっての野分は、恋人どころか対等な友人ですらないのである。だが当の野分は、愛しいご主人様が自ら考えた名前を呼んでくれる、それだけで、嬉しそうに笑ってしまう。心の底から悦び、小走りに霧島の下へ行き…膝を曲げ、霧島の腕の中に収まるのだ。

「ん……よし、よし……いい子ですね。三榛もお疲れ様ですよ。今日もよく、頑張ってくれましたね」

野分からしてみれば、少し苦しい姿勢である。だが、最愛のご主人様に抱きしめられているという事実、そして、そのご主人様に褒められているという事実、その両者が、彼女を天にも昇る心地にさせていた。このままずっとこうしていたい、そう思えたのである。

「…あら？」

だが、その願いはすぐに幻となった。野分は携帯端末を上着のポケットに入れていたのだが、それが振動し始めたのである。マナーモードだから音が鳴る訳ではないが、抱き着いて密着しているために、その振動が霧島にも伝わったのだ。

「すみません、その…」

「うふふ、そんな気にしなくていいですから。出てあげてください」

その振動は長く続いていた。という事は、電話が何かだ。名残惜しさと申し訳なきがないまぜになったような表情を浮かべる野分に、しかし霧島は笑顔を向けてやる。部屋に呼び出して、いざこれから「使う」…という時にこうなったのであれば、霧島も気分を害したろう。だが、この状況では責められない。

「どうしたの？ …うん、確かに五時だから、そうだけど…もう、あんまり我儘言わないでよ…」

携帯端末を耳に当て、霧島に背を向けて離し始めた野分の様子が、どうもおかしい。霧島も思わず、首を傾げた。あの様子だと、野分が話している相手は舞風だろう。まだ一週間程度しか付き合いがないとは言え、あのような、手のかかる



子供を相手にするような態度を野分が見せるのは、舞風相手の時ぐらいだ。霧島も、その事には気付いていた。

野分と舞風は、仲がいい。元々、かつての第四駆逐隊に属する野分、嵐、萩風、舞風の四人は、どの個体であっても互いに仲が良いのだが、中でも舞風は野分によく懐く傾向がある。それはブインでも同じようで、香取から渡された資料にも、その旨が記されていた。

「判った、判ったから…うん、そうしてあげるから…だからあんまりそんな風に言わないで、ね？」

しかし、舞風相手に喋っているにしては、様子が不穏である。

困ったような笑みを浮かべる、というのと、困っているが笑顔で誤魔化す、というのでは、見た目はよく似ていても決定的に異なる。前者は愛する子供のやんちゃをたしなめる、というような成分を持つが、後者は、危険人物に話しかけられ、彼が激しないようにいなしている、というような成分を持つ。

どうも、野分の今の様子は、後者に属するようには見えた。

「うん、すぐ行くから…ほんとにすぐよ、片付けとか、そういう事したら、行くから…うん、うん…じゃあ、後でね、うん」

ようやく、野分が携帯端末を耳から離す。そのまま、大きく溜息を吐いた。これにもまた、霧島は首を傾げる。

まるで霧島がないかのように振る舞っている野分のその仕草は、しかし、霧島の存在を忘れていた訳でも、無視している訳でもない。むしろ、強く意識しているからこそ、そうなっているのだ。どんな顔をして振り向けばいいのか判らないから、背を向けたままなのだ。

であれば、彼女に懐いている筈の舞風との電話で、どうしてそんな様子になってしまうのか、気にならない筈がなかった。

「その、すいません。本当に申し訳ないのですが…今日は、お休みを頂いても、よろしいでしょうか…？」

意を決して振り返った野分の表情からは、あの柔らかさは消えていた。霧島の前では、プライベートな自分をさらけ出せるようになった筈の彼女が、しかし、いかにも外向けな、緊張した表情を浮かべていた。最初に出会った時ほどガチガチになっている訳ではないが、しかし、謹厳さと涼やかさが同時に感じられる、「いつもの」野分であった。

「別に、一日ぐらい、構いませんが…舞風さんと何か、あったのですか？」

椅子に座りなおし、浅く足を組んだ霧島が、そう問いかける。途端、野分の全身に緊張が走った。ぴいんっ、と背を伸ばし、気をつけの、直立不動の体勢を取

ってしまう。あまりに判りやすい反応に、霧島は思わず、笑ってしまいそうになった。

「もう、そんなになるぐらいなら、廊下に出てから話せばよかったですように」

「あ、い、いえ、そ、そのっ、まさかあんな話になるとは思ってたなくて、その、廊下に出て誰かに見られるのも、と、その…」

「ふふ…私には、見られてもいいんですか？」

流石にここまで来ると、笑ってしまいそうだった霧島も、本当に笑ってしまった。野分の様子は、それだけ可笑しかった。本人は真剣なのだろうが、霧島からすると、いじめ甲斐のある玩具だ。わざと意地悪な事を言ってやれば、律儀に反応し、顔を赤くしてくれる。恐らく、木曾の前では、自分自身がこうなのだろう。

「そ、そ、そのっ、ええと、その…！」

「いいんですよ、怒ってる訳じゃないんですから」

真っ赤な顔で、目を白黒させる野分は愛おしい。いつまでも見ていたいし、いつまでもいじめてやりたい。が、そういう訳にもいかないだろう。霧島は立ち上がると、野分に歩み寄り、ぼん、と肩に手を載せた。

「それだけ、三榛が私を信用してくれている、という事なのでしょう？ 身内と言い合ってるような、恥ずかしい姿を…他人には見せられない。でも、私になら見せられる。だから、ずっとここにいたまま、電話していたんでしょう？ それは嬉しい事なんですよ、三榛」

そう言う顔を近づけ、野分のおでこにキスしてやる。ちゅ、という音と共に、霧島の顔はゆっくりと野分のそれから離れていく。相変わらず野分の顔は湯だった蛸のようであったが、しかし、その目はまっすぐ、霧島を見詰めていた。

「けど、何かあるなら、私に話してくださいね？」

にこり、と笑う霧島。安心させるように、不安を取り除くように。だがそれでも、野分は迷っているようだった。まっすぐ霧島を見詰めていた目は、しかし、霧島の笑顔が眩しすぎるとでも言うのか、逸らされて下を向いている。

「で、でも…その…ご、ご迷惑、おかけする訳には…」

ぼそぼそと、またもごもごと…霧島に伝えるためと言うよりは、自分を納得させるためであるかのように、呟く野分。その様子に、霧島も一瞬、真顔になり一同時に、鼻から小さく溜息を吐いたが、それもほんの一時の事である。

「あ、え、ちょ、ちょっ…わっ」

霧島は、壁際に野分を追い込んだ。元々、霧島は壁際に近いところに座っており、また、野分はその霧島と話すために近づいてきていたから、二人は壁に近い場所に立っていた。野分を追い込むと、霧島は壁に手を突き、ずいと顔を近づけ

る。いわゆる、壁ドンに近い体勢である。

「三榛？ あなたは、自分が一体何なのか、判っているんですか？ ねえ？」

「え？ えっ？ えっ？」

霧島は、変わらず、笑顔を浮かべている。笑顔を浮かべたまま、野分を問い詰めている。それは異様だった。笑顔で野分を壁際に追い詰め、笑顔で顔を近づけ、しかし、問い詰めている。困惑した野分は、涙すら浮かべそうになってしまう。

「言い方を変えましょうか。三榛、あなたは私の何ですか？ 私の、何なんです？」

「あ、え、その、えっと、その…」

いよいよ、野分は答えられない。故に、続きを言うのは、霧島の役目となる。

「肉便器、でしょう？ 三榛は私の所有物、そうでしょう？」

答えを自ら言った霧島の声音は、しかし、問い詰めていた時のそれとは全く異なっていた。その声音は優しく、慈愛に満ちていた。発言の内容は、むしろ鬼畜外道のそれであったが、しかし、泣きそうにすらなっていた野分が、驚いて顔を上げるほどに、それは優しいものであった。

「いいですか、三榛。三榛はもう、あなた自身のモノではありません。三榛の身体も、心も、全て私のモノです。だから、あなたの勝手な判断で面倒を抱え込んだり、それで精神的に辛い思いをしたりするのは、許しません。三榛は、私のモノなんですから。私のモノを管理するのは、私なんです」

最初、野分はきょとんとしていた。何を言われたのか、理解が追い付かなかったのだろう。霧島の顔を見詰めたまま、呆けたような表情を浮かべていた。やがて、言われた内容に頭が追い付き始める。それに伴い、表情はそのまま、涙が一筋、目尻から頬を伝った。問い詰められていた時にも流れなかった、涙が。

要するに、霧島は野分を心配しているのだ。それは、恋人が愛しい人を心配するような類のものではない。自らの所有物が、自分の手の届かないところで傷つくのは問題だと、そういう態度である。しかしそういう歪んだ心配の仕方であっても…いや、そうであったからこそ、野分の心には響いたようだ。

自分は、霧島の数ある玩具の一つでしかないかもしれない。だがそれでも、管理もせず雑に放り出し、壊れたら捨てる、そのような扱いはしない。その玩具を、心配してくれる。そういう、慈悲深い所有者であると知って、野分は歡喜の涙を流したのだ。

「ありがとう…ごじます…」

言うべき言葉が見つからず、礼だけを述べる野分。その姿に、愛しさを感じたのだろう。霧島は、幾分か和らいた笑みに表情を変えると、軽く首を傾げ、目尻

に溜まった涙を舐め取ってやった。

「いいんですよ。まあ…さつきすぐ行くって言ってましたから、今、細かい話をする必要はありません。明日にでも、詳しく話を聞かせてくださいね」

霧島の姿は、野分からは、神のようにすら見えていただろう。霧島を見るその眼差しは、明らかに崇拜の類のものであった。

しばし、時間を遡る。野分が霧島と初めて会ったあの日、その数日前。もうすっかり夜も暮れた頃、野分の部屋、その寝室。

「ん、ちゅ、ちゅるっ、ちゅ、ちゅ、ちゅうっ…♥」

ベッドの上に、女体が二つ。片方は、駆逐艦舞風。ベッドに仰向けに寝転がった彼女は、下着すらまもっていない。一方、もう一人…部屋の主、野分は、その舞風の上に馬乗りになっていた。こちらは、陽炎型の制服を着たままである。彼女は上体を倒し、舞風に口付けしていた。

いやらしい音をわざと立てながら、舌を差し入れて舞風の口腔内を貪っている。舞風の方とは言えば、それで嫌がるどころかむしろ嬉しそうに野分の口へ吸い付き、自らの舌を野分のそれに絡ませている。舞風の口腔内で、互いの舌が、まるでのたうつ二匹のナメクジのように、複雑に絡み合う。

「んうっ…♥ んじゅ、ちゅる、ちゅっ、ちゅっ、ちゅううっ…♥」

白い手袋に包まれた野分の手が、舞風の顔に伸びる。その指は彼女の鼻を摘み、潰す。元々、ディーブキス中は口が塞がれているし、激しく求め合えば、鼻呼吸もうまくはできない。その鼻呼吸すら封じられた今、舞風は呼吸ができなくなった。結果だけ見れば、野分に首を絞められているのと同じである。

しかし、舞風は嫌がる素振りを見せない。どころか、より激しく、野分の口に吸い付いている。先程よりも更に高く響くようになったいやらしい音は寝室全体に響き渡り、舞風を興奮させる。

そう、舞風は興奮していた。愛しの野分とキスしている事に。愛しの野分に窒息させられている、その事実。少しずつ、少しずつ、意識が遠のき始める。自分が自分でなくなる感覚。意識が肉体から離れ、自分の姿を第三者の視点から眺めるような感覚。その視界には、愛する人をいやらしく求め続ける、メスの姿が映っていた。

「ぶはっ…!♥ はあっ、はあっ…♥ もう、野分ったら…意地悪♥」

しばらくして、野分が指を離し、同時に口も離して上体を起こす。解放された舞風は、肩で息をしながら、愛しい人の整った顔を見上げていた。自分の顔が上気しているのが分かる。酸欠の飲びに頬を染め、いやらしく発情したメスの顔を

晒しているのが、判る。

「ふふっ…♥ でも、そういうの、好きでしょう？♥ 舞風、好きだもんね？  
♥ 私に、殺されるの…♥」

先程まで舞風の鼻を摘まんでいたあの手、繊細な指を手袋に包んだその手が、彼女の首筋に伸びる。指先が、つつ…♥ と、首筋をなぞる。それだけで、電気のような何か背中を走り抜けていった。

「うん、好き…♥ 私、死ぬの大好きになっちゃった…♥ あんなに、怖かったのに…♥ 怖くて、夜も眠れなくて…野分にたくさん、迷惑かけちゃったのに…♥ 私ね、今、死ぬの大好きなんだ…♥」

蕩けた舞風の瞳が、媚びるように野分を見上げる。同時に、自らの両手で、野分の両手首を掴み—その両手を、自らの首へと導く。手袋越しに、愛しい人の指が自らの首にまわりついていく。その感覚が、何よりも心地いい。

「あの時の様子、見せてあげたいな…♥ 覚えてる？♥ 野分が最初に、舞風の首を絞めた時…すっごい暴れたんだよ？♥ あの頃はまだ、問題児だったもんね…♥」

その言葉と共に、野分の両手に力が入る。両手で、左右両側から包み込むように指をまわりつかせ、頸動脈を圧迫するのだ。舞風と言えば、恍惚とした表情で、その行為を受け入れている。あの時を思い出しながら。最初に首を絞められた、あの時を。

当時、舞風は一種の躁鬱病だった。今風に言えば、双極性障害である。躁状態の時は、気分は爽快、とにかく楽しくて仕方なく、所構わず踊り狂う。だが、いったん鬱状態に入れば、食欲はなくなり、好きなものを食べても砂を嚙んでいるようにしか感じられず、好きな踊りすら、する気がなくなる。そのギャップはやがて舞風の心のバランスを崩し、躁状態で踊っているところに話しかけられると、邪魔をされたと感じ、怒りだすようにすらなった。

「…♥ …っ、か…♥ はっ…♥」

結局その原因は、死への恐怖であった。死への恐怖を誤魔化そうと、踊って明るく振る舞う事が、逆に心に負担をかけ—結果、病んだ舞風は、彼女の世話をすする野分をも追い詰めてしまった。

今でも、はっきりと思い出せる。あの日の野分を。狂気にとりつかれた、と言うよりはむしろ、狂気そのものが野分という人間の形をとったかのような、そんな顔をしていた。彼女は舞風を押し倒し、首を絞めた。

「死ぬのが怖いなんて結局、死んだ事がないから、怖いよ♥ だったら、死んでみればいいの♥ 死んでみましょう？♥ 何度も死ねば…その内、慣れる

でしょ…♥」

野分の口から、あの日の台詞が零れる。そうだ、あの日、野分はそう言って舞風の首を絞めた。あの時は、野分が怖くて怖くて仕方なかった。だが今は、あの日の台詞と共に自らの首を絞めてくれる野分が、愛おしくてたまらない。

「あ…♥ かっ…♥」

あの日の、首を絞められ始めてからの記憶は曖昧である。確かに、泣き叫び、暴れたような記憶はある。だが、どうもぼんやりしていて、詳しくは思い出せない。代わりに、どこかでカチッとスイッチが入ったかのように、窒息の快楽に目覚めた瞬間を、覚えている。

その快感を今、舞風は享受していた。脳から酸素が徐々に失われ、意識が遠のく。さっきのように、自分の肉体を第三者視点で見ているような、肉体と意識が分離した、不思議な感覚に襲われる。やがて、空飛ぶ絨毯にでも乗っているかのようなフワフワした感覚と、湯たんぽに包まれているかのような温かさが感じられるようになる。同時に、世界から音が失われていく。無音の世界。首を絞める野分と、首を絞められる自分。それ以外は存在しない、静寂の世界。

野分が何か言っている。だが、その声が舞風に届く事はない。彼女がいるのは、静寂の世界だからだ。その中で、子宮が疼く。首を絞められ、夢を見ているような、もしくは幻覚を見ているような気分に襲われ、多幸福感に包まれる。

だらしく口が開き、酸素を求めてか、舌が突き出される。口端から涎が垂れていくが、それを汚いと思うだけの能力すら、舞風には残されていない。視界がぼんやりと歪んでいく。世界が色彩を失い、野分の顔すら、もう、のっぺらぼうのようにしか見えない。だがその世界は、決して、醜いものではない。全てが、遠い、しかし美しい、楽園のように感じられていた。

「ぶはあっ!♥ はあーっ、はあーっ、はあーっ、はあーっ…!♥」

野分が両手の力を緩めた。本能的に再開された呼吸が、脳に酸素を送り込んでいく。同時に視界が鮮明さを取り戻す。世界が色づき、野分の顔が露わになる一愛しい野分の、口の端を吊り上げ、邪悪な笑みを浮かべた顔。自らの手の中でメスが苦しむところを見て喜ぶ、嗜虐の笑みを浮かべた顔。なんと美しいのだろう。この人になら殺されていい。いや、この人に、殺して欲しい。私の全てはこの人のもの。この人が死ねと言ったら、今すぐにでも死んでみせる。

半分トリップしたままの脳内で、恍惚とした表情を浮かべながらそう考えた時、急速に音が戻ってきた。自分が、肩で息をする音が聞こえる。これは、首絞めが中断されてから何回目かの呼吸だろうか。一瞬、そんな事が頭をよぎったが、舞風にそんな事が判る筈もない。

「殺してえ…♥ 殺してえ…♥ ねえ…♥ 殺してえ…♥ 早く殺してよお…♥」

野分に向けて手を伸ばすが、しかし、その行為は何かを意図したものではない。野分を抱きしめようとしたものでもないし、頬を撫でるためのものでもない。だが舞風は両手を伸ばした。何かを求めるように。まるで、彼女の願いはその手に載せられるものだど、勘違いしているかのよう。

「いいよ…♥ 殺してあげる…♥ でも…私の事も、気持ちよくしてね?♥」

野分は、あの笑顔を浮かべたままだった。邪悪で美しい、あの笑顔。手のひらの上でメスの命を転がし、弄ぶ、どす黒い喜びに彩られた笑顔である。その笑顔のまま、しかし両手を一度首筋から離れた彼女は、舞風の上でスカートを脱ぎにかかる。

そのスカートは、明らかに、何かに下から押し上げられていた。女性のものとは思えない、奇妙な山。スカートが取り去られると共に、その正体が露わになる。ガチガチに硬くなり、また熱く、大きく勃起したそれは、彼女のふたなりおちんぼであった。

「忘れないでね…♥ 舞風は、野分のオナホールなんだから…死ぬのはいいけど、野分の事、気持ちよくしながら、死んでね?♥」

舞風の秘部は、ぐちゃぐちゃで酷い有様だった。洪水のような、というのは一昔前の表現だが、これはもう、お漏らした後のような、と言った方が適切だろう。白みを帯びた愛液が大量に分泌され、秘部の周辺だけでなく太腿にまでべっとりと付着している。陰唇は長湯でふやけた皮膚のようにだらしのない姿を晒し、膣口が、ちんぽを今か今かと待ち構えている。舞風はもう、首を絞められただけで、そういう姿を晒すモノに墮ちてしまっていた。窒息の快楽に頭まで浸かった、マゾ豚である。自分の死を快楽と感じ、それ故に死を願う、救いようのない豚だ。

「〜〜…っ!!♥」

陰唇に擦り付けられたと思ったちんぽ。そのちんぽが膣口にぐに、と押し付けられたかと思った次の瞬間、それは奥まで突き込まれていた。亀頭が子宮を潰し、舞風は背を反らした。首を絞められた訳でもないのに呼吸ができなくなり、視界に星が舞った。声すらあげられなかった。嬌声も、悲鳴も、喘ぎ声すら、あがらない。ただただ、野分のちんぽから与えられる暴力的な悦楽に、翻弄される。

「〜っ…!♥」

直後、野分の両手に力が込められた。ぐぐぐ、と、首筋が両側から圧迫されているのが判る。同時に、脳に酸素を届けられなくなった自分を自覚する。今、自分は死の過程にあるのだと…殺される過程にあるのだと、自覚する。

それは、最高の快樂だった。死ぬという事は、舞風にとって、絶頂にも等しい。舞風にとって、死とは今や恐怖の対象ではなく、今までの人生全てを捨て去ってでも望む夢であった。渴いた喉が水を求めるように、舞風は快樂を望んでいた。死という快樂を。野分という最愛の人に与えられる、最高のご褒美を。

故に、そのご褒美を今、与えられつつあると知った舞風の膣は、きゅううっと締まる。彼女自身、子宮が締め付けられるような快樂を感じていた。子宮を紐で、でたらめに、ぐるぐるに縛られて、その両端を引っ張られているような感覚である。

「ほんと、よく締まる…♥ いいオナホ…♥」

野分が独り言のように呟く。実際、それは舞風に対してかけた言葉ではなかっただろう。舞風の顔は恍惚としており、思考能力が既に失われている事を示している。無言でオナニーする者もいれば、オナニー中に何かを呟く者もいる。ただ、それだけの事であった。

そう、野分はオナニーをしていた。決して、セックスはしていなかった。彼女がしていたのは、舞風という、愛しいオナホールを使ったオナニーであった。それは、最高に気持ちのいいオナニーであった。首を絞めると、膣がよく締まる。

「おっ…！♥ かっ…は…♥」

舞風の方でも、ちんぽに挟られているのを感じている。自らの子宮が締め付けられる感覚と共に、膣を締めているのである。膣内の襞、一枚一枚がちんぽにまとわりつき、しかし、野分のちんぽはその襞を削り落とすかのように、勢いよく入り、そして出ていく。性行為と言うよりは、掘削と表現した方が適切なような、えげつない抽送であった。

それ故にだろう。野分と舞風の結合部、特に舞風の秘部は、酷い有様だった。ちんぽを挿入する前からして既に、お漏らしでもしたかのようにびちゃびちゃだったが、今は余計に酷い。白みを帯びた愛液が、ちんぽによって掻き出され、泡を立てている。この上なく淫靡な光景である。

「あ…あっ…！♥ ぎ、ひっ…！♥」

脳に残された酸素が、残り少なくなりつつあるのだろう。舞風の目はぐるりと上を向いて、三白眼の様相を呈している。だがやはり、舞風の顔が恐怖に歪む事はない。確かに、酸欠による苦痛と苦悶が、その顔をこね回していたが…そこにあるのは、むしろ、歡喜であった。愛する野分に首を絞められる事への、歡喜である。

「ちゅうっ…！♥ ちゆる、ちゅっ、じゅ、じゅるっ…！♥」

酸素を求めてか、口を半開きにして突き出した舌は、物欲しそうにも見える。



野分は突然、上体を折ると、その口へ吸い付いた。首を絞めたまま、腰も振り続けたまま、舞風の唇と舌に、吸い付いたのである。

顔を横にして口付けすると、舌を差し入れ、舌同士を絡ませる。それを受けた舞風は、朦朧とした意識の中、自ら舌を差し出していた。愛しの野分に殺されるという歓喜、それ一色に塗り潰された脳内で、しかし、舞風は行動していた。

私の全てを、奪って欲しい。

私の全てを、あなたのものにして欲しい。

全部、全部—

「じゅる、じゅ、じゅうっ…♥ じゅる、ちゅるる、ちゅっ…♥」

朧げな意識の中、その願いだけが、舞風を突き動かしていた。結局、舞風が野分に殺してと願うのも、それが理由に他ならない。彼女は、奪ってほしいのだ。自分の全てを…命を含めた全てを、野分に奪ってほしいのだ。だからこそ、舞風はあれほど自らを殺して欲しいと願い、そして今、舌を差し出しているのである。

野分は、その願いに充分、答えていた。本来ならば、互いの手を恋人繋ぎにでもしてやるような、いやらしいキス。周囲の空気が粘っこく感じられるほどにしつこく、彼女は舞風の口腔を貪っている。唇を舐め、舌を絡め…歯垢をこそげ落としそうなほど、口腔内を舐め、ねぶる。

だがその行為は、実際には、舞風の首を絞めながら行われている。舞風を殺しながら、その上、オナホールとして使いながら、行われている。舞風は、全てを野分に捧げていた。そして野分は、その全てを奪い、蹂躪していた。

首を絞めて殺しながら、そのお陰で膣の締まりがよくなると言いつつオナニーし、気が向けば口を貪って別の方向からも快感を得る。それは、舞風の尊厳というものを、徹底的に蹂躪する行為であった。

「じゅるっ、じゅうっ！♥ ちゅ、ちゅるっ、じゅ、ちゅるるっ…♥」

卑猥な音が、部屋中に響く。先程ディープキスしていた時よりも、より大きく、激しく。しかし、最早舞風の耳に、その音は届いていない。あの、無音の世界が…酸欠の世界が、再び彼女の前に現れていた。どんなに音を立てようと、どんなに激しく貪ろうと、何も聞こえない。ただ、口と、首と、膣からやってくる快樂だけが、感じられる。

「ぶはあっ！♥ はあっ、はあっ、はあっ…！♥」

やがて、これ以上は死ぬと判断したのだろう。野分がその両手を離し、一旦腰の動きも止める。直後、口を大きく開け、必死に酸素を取り込もうとする舞風の姿が、その視界に映る。浅ましく、まるで食べるように息を吸う舞風の顔は惨めであり、また滑稽ですらあった。当の本人は、その事に気付いてすらいない。

「のわ、のわっ、き…♥ 好き…♥ すき、すきいっ…♥ ころ、して…♥ 殺して、殺してえっ…♥ はやく…♥ 早く、殺してえ…♥」

そして、息も落ち着かぬ内から、うわ言のように呟き始める。実際それは、うわ言のようなものであった。窒息の快樂にトリップした彼女の頭は、現実には帰ってきていない。寝ている間、突発的に発される寝言のように、その言葉に脈絡はないのだ。

「好き？♥ 何が、好きなのかしらね…♥ 野分の事が、好き？♥ それとも、首を絞められるのが、好き？♥」

その答えを聞かず、野分は再び、舞風の首を絞め始めた。同時に、腰の動きも再開される。舞風の膣が、えげつないの一言でしか表現できないほどに激しく、ほじられ始める。膣肉を、耕し始める。

「そうよね、舞風はこういうの、好きよね…♥ いっぱい死にましようね…♥」

野分の行為には、とにかく容赦がなかった。彼女は数え切れないほどに舞風と行為を重ねており、しかも、首絞めはお気に入りのプレイであった。故に、野分は、舞風の限界をよく知っていた。これ以上責めてしまうとオちてしまう…死んでしまうというところを、把握していた。

故に、毎回、舞風はそのぎりぎりのところまで追い詰められた。その間は、膣内をずっと、野分のちんぽに挟られている。子宮がひしゃげるほどに、奥を叩かれ続けている。視界に星が舞い、自然に背中が反る。多幸感が、舞風の全身を包んでいた。

「あ…♥ きもちい…♥ そろそろ、イっちゃいそ…♥」

やがて、野分の腰の動きが変わった。ちんぽが抜けそうになるまで腰を引いて、思い切り奥まで突き刺す…というようなものは鳴りを潜め、代わりに、一番奥の方を小刻みに、しかし何度も何度もしつこく、抉り始める。それは、野分の絶頂に近いという事を意味していた。

舞風にはもう、それを理解する能力は残っていない。ただただ、野分の暴力に身を晒し、死の予感に歓喜するだけである。蛇のような執念深く、何度も何度も子宮を叩かれ、痛いほどの快樂が、僅かに残った彼女の意識を押し流していく。

「あ…あ…♥ イく、イく、イっちゃあ…!♥ ん…♥」

腰を振り続けたまま、野分が絶頂を迎える。びゅうびゅうと精液を鈴口から吐き出しながら、しかし、そのちんぽは萎える事もなく、その硬度と大きさを保ったまま、舞風の膣内を抉り続ける。まとわりつく肉襞を削り落とすかのように、膣内をほじり続ける。子宮もまた、精液を直接かけられながらもひたすらに叩か

れ続け、いびつに歪む。

「~~~~~っっっっ……！！♥♥」

最早、舞風には、自我とか、自意識とか、そう表現できるものは残っていなかった。目は完全に白目を剥き、半開きになった口から飛び出た唇はだらんと垂れさがり、口端からはとめどなく涎が垂れ、首を絞める野分の手袋を汚している。もう、いくとか、イかないとか、そういう区別はもう、彼女にはつけられなかった。強いて言うならば、もうずっと、イき続けているのだろう。天国に。

「…♥」

野分がゆっくりと両手を離れた時、舞風の意識は落ちていた。

死んではない。殺さないように、最後の射精に合わせて意識だけ落ちるように調節する事も、野分にはできるようだった。それだけ、回数を重ねたという事なのだろう。ちよろろ…♥ と、舞風の股間が生暖かい液体を排泄し始める。失禁しているのだ。彼女のおしっこは、自らの股間を、太腿を、そして、野分の下腹部をも汚していく。と同時に、そこへこびりついていた、白みを帯び、泡立った愛液を、洗い落していく。

やがて、野分の腰が再び、動き始めた。意識を失い、脱力した舞風を、しかし、再び「使い」始めていた。

霧島が天龍の面接を行った翌日つまり、野分が舞風に電話で呼び出された翌日、平成二八年八月二八日、日曜日。この日は、霧島の休日であった。

現代の海軍の休日制度は、旧自衛隊のそれを引き継いでいる。つまり、週休二日制である。休みの日が任務等で潰れた場合は代休を取れる、という点も変わっていない。完全週休二日制ではないが、ともあれ週に一日の休みは保障されている形だ。

ちなみに言えば、これは霧島のような、役目に就いている人間の話である。霧島は、『ブイン艦娘特別陸戦隊司令官』という役職に就いている。ところが、鎮守府というのは全員が全員、役目を持っている訳ではない。日々の出撃から季節の大規模作戦まで、多くの出撃をこなす主力艦娘もいれば、大規模作戦ですら出撃機会がほぼ存在しない、暇な艦娘もいる。そういう暇な艦娘というのが、例えば野分や舞風であり…そういう艦娘は、実質、毎日が夏休みであった。個室居酒屋雷電を出店している雷と電、スーパーマーケット白露を出店している白露、村雨、五月雨、涼風といった面々は、皆、無役の人間である。彼女達には、そういう事ができるだけの時間があるのだ。だからこそ野分も、霧島の手伝いができた訳である。

ともあれ、霧島は今日、休みである。好都合ではあった。昨日の野分の様子から見て、舞風と何か悶着を起こしたのは確実である。その問題が、昨日の内に終わるとは限らない。翌日…つまり今日だが、日を跨いでも尾を引く可能性は充分にある。今日がもし霧島の勤務日であれば、野分がそれを引きずったまま勤務する羽目になってしまう。霧島の業務を手伝ってくれる有能な助手が、である。

だが、幸いにも今日は休日だ。なら、今日の内に野分とよく話し合っておけばいい。問題がまだ解決していなかったとしても、業務への悪影響は大きく軽減されるだろう。

…そういう、心積もりでいたのだ。

「ふふー。すいません、朝からお邪魔してしまって」

だが、今、霧島の目の前にいるのは舞風であった。悪戯っぽいような、しかしどこかにはかむように緊張した笑顔を浮かべて、机の前の椅子に座っている。

霧島にしてみれば、計算を狂わされた形である。

昨日は結局、野分から来た連絡は、夜遅くに携帯端末へ送られてきた「詳しくは明日お話します」という旨のメッセージだけであった。なら今日か、と思って朝起きた霧島の携帯端末に入っていたのは、しかし、「お話ししたい事があるので、お邪魔してもよろしいですか」という旨の、舞風からのメッセージだったのである。

完全に、青天の霹靂であった。朝、野分から連絡が来ると思っていたところに、問題を起こした相手から連絡が来たのだ。しかも、部屋に行きたいと言う。

流石の霧島も動転した。単に突然だったから、野分の悶着の相手だから、というだけではない。昨日、野分には言わなかったが、今回の問題には、自分が関係しているのではないかと、そう思っていたのである。

元々、野分と舞風というのは、どの個体も大抵、仲がいい。それはこのブインでも同じだというのは、面接の準備として見た資料や、野分からの言葉で確認している。そして、霧島が野分を肉便器に墮としたあの日以来、野分は、毎日のように霧島の部屋に呼び出されていた。となれば、舞風が霧島に嫉妬しても不思議はない。

親友、もしくは家族の野分が、霧島という新参者に夢中になったから嫉妬した…その程度の話ならば、話は簡単である。ただ、もし野分と舞風が恋人関係にあるのであれば、こじれてくる。正直に言えば、野分に恋人がいる可能性など、昨日の夜まで考えた事もなかった。「お客さん」なら沢山いそうだと、思っていたが—ともあれ、今回の騒動に自分が関係しているのか、いないのか、聞いてみる必要があるだろう。

そういう事を、霧島は考えていたのである。

そんなところに、その本人が出てきたのであるから、これは驚くと言う方が無理であった。しかも霧島は、ブインの舞風とはまだ、会った事もなかったのである。むろん、大湊時代に、大湊所属の舞風と話した事はある。が、いかに艦娘がクローン人間であるとは言え、ブインの舞風とは全くの別人である。しかも、ブインの舞風とはまだ、直接顔を合わせた事すらなかったのだ。当然面接もまだで、彼女についての資料を読みはしたが、それだけである。

だから、霧島もどう返答すべきか悩んだ。正直に言えば、来てほしくはない。とは言え、来るなども言いづらい。これから部下になる相手が、「お話したい事があるから」とまで言っているのだから、それは受け入れてやった方がいいに決まっている。

結果として、霧島は舞風の願いを受け入れ、彼女は部屋にやってきたのである。呼び鈴に応じて部屋の扉を開けると、舞風は、「お邪魔します」と言いながら、一方で、くると回転しながら、踊るように入ってきた。このブインの舞風もまた、踊り好きなようだ。

敬礼はなかったが、霧島は気にしなかった。そもそもこのブインにおいては、オフの日に敬礼するような艦娘はいない。それがブイン基地全体の方針なのだ。一日く、休みの日にまで堅苦しい真似はするな、と。いかにも木曾らしい考え方だと、霧島は思う。もしかすれば、今は不在の提督の方針なのかもしれないが。

「いえ、いいんですよ。これ、お茶ですから…」

「あっ、ありがとうございます♪」

言いながら湯呑に淹れた番茶を出す、舞風の礼が聞こえた。その返事にまた笑顔を向けながら、霧島も椅子に座る。ちょうど机を挟んで反対側、正面に彼女を見据えるような形である。

舞風は、私服姿だった。Vネックで裾をフレアにしたプルオーバーに、ガウチョスカートという出で立ちである。ござっぱりとした、可愛げのある服装だ。一方、霧島は若竹色と常盤色の市松模様が入った男物の浴衣を、黒の兵児帯で締めている。こういう、男物の着物を私服とする艦娘は案外、数が多い。艦娘は基本的に大正昭和の時代の存在であり、和服に親しみがある一方で、乗っていたのが男ばかりだったせいで、女物にはあまり馴染みがないのだ。そのため、わざわざ男物を仕立てて貰うのである。同様に洋服を私服とする場合でも、男装風の服装を好む者はそれなりに多い。

「それで、話というのは…？」

「あー、えーと…その、のわっちがいつもお世話になってます、っていう話な

んですけど〜…」

舞風は、何処かとぼけたような様子を見せる個体が多い。彼女も、その気があるようだ。ただ、その言葉の端々から、緊張が伺えるのも事実であった。先程から浮かべている笑顔に、どこか緊張した要素が見られたのは、気のせいではなかったらしい。

「そのお〜…霧島さん、やっぱり、昨日私のがわっちとひと悶着あったって、ご存知ですね？」

「ええ。と言っても、何もかも知っている訳ではなくて…何かあったらしい、という程度ですけれども」

ここで霧島が嘘をつく理由はない。知っているだけの事を、答える。

「そうでしたか。その〜…あはは、お恥ずかしながら、昨日は私がちょっとブツツンしちゃって。いや一面目ない事で、たはは…」

どこか恥ずかしそうに笑い、そしてその気恥ずかしさを隠すかのように、自らの後頭部に手をやる舞風。実際、自分でも口にしたように、後ろめたい気持ちがどこかにあるのだろう。昔のやんちゃを指摘されて赤面しているかのような、そんな様子だ。

「ブツツン…ですか？」

「ええ。霧島さん、多分、私の資料見ましたよね？ 私、以前、頭の病気やってるんですよ」

自らの後頭部を撫でていた指が、今度は側頭部に移動する。その人差し指でこめかみを指し、くるくると回す舞風。「ここがイカれちゃってたんです」とでも言いたいのだろうか、あのはにかむような笑顔のまま、こちらを見ている。

確かに彼女の言う通り、霧島は、その情報を資料から得ている。舞風はかつて、軍医に双極性障害と診断され、治療を受けていた時期がある。

艦娘と言えど、人間である。心を病む者も、中にはいる。と言っても、その数は、一般的な軍人に比べれば非常に少ない。結局、軍人が心を病むのは、戦争神経症によるものが大多数である。その点、艦娘は軍艦としての記憶を持つのだ。死線を乗り越えてきたどころか、全員、一度は死んでいる。余程大破状態で無理に戦闘を継続しようとしなければ戦死する事はないという事実もあり、戦争神経症になる艦娘は皆無と言ってもいい。

そのため、心を病んだ艦娘というのは、一般の人間と同じく鬱病や睡眠障害に苦しんでいる者が大多数である。舞風もそうだった。双極性障害…一昔前の表現で言えば躁鬱病だが、そう診断されていた。ただ、その根本の原因が艦娘としては珍しいものだったのだが、霧島もそこまでは知らない。資料には、それほど詳

しい話は載っていなかった。

「一応、今はもう、治ったんですけど…やっぱり私、普通の人よりはちょっと、ヒステリックなんですよ」

ふむ、と霧島が首を傾げる。どう答えたものか、難しい。

要は、自分はヒステリックな性格だと、そう伝えたいのだろう。ただ、ストレートにヒステリックだと言うと、どうも具合が悪い。それで、昔病気したから、とお茶を濁したのだろう。

しかし治ったのであれば、当時の病気と今の舞風の性格に、因果関係はないはずだ。心の病気は一時的な変調であって、人格を恒久的に破壊するものではない。今の彼女がヒステリックな性格をしているというのであれば、それは元からそうだったか、もしくはそういう性格に成長した、というだけの話であり、過去の病歴は関係ない。

とは言え、それを指摘するのも野暮というものである。霧島の頭の回転がもっと遅ければ、こんな事は気付かなかっただろうし、また考えもしなかったろう。当然、どう答えたものかとやきもきもしなかったろう。結局、まごついている間に、舞風が話を続けてくれた。

「まあ、それで…その、結局私、嫉妬しちゃってたんですよね。…霧島さんに」

だが、続いたその話は、霧島に少なからず衝撃を与えた。やっぱり、と心の中で小さく呟く。

「私、のわっちが大好きなんです。その大好きなのわっちが、誰かに夢中になって、私の事を全然見てくれないっていうのは、やっぱりこう、辛いものがあって。それで昨日、のわっちの部屋で暴れちゃったんですよね。あはは…」

舞風は笑っているが、霧島からしてみると、笑いごとではない。舞風は、野分を親友や家族として見ていると言うよりは、恋人として見ているような口ぶりである。浮気、泥棒猫、寝取り…そういう単語が頭をよぎる。

「その…ええと」

故に、流石の霧島も、言葉に詰まる。心臓が鳴り、肩肘が無意識の内に張る。

「もしかして、舞風さんって、三榛…野分さんと付き合ってたんじゃないんですか？ 私、てっきり野分さんはフリーかと…」

「あ、いえいえ、違いますよ。あ、あー、いや、違うっていうのは、私とのわっちが付き合ってるって部分で。のわちはフリーですよ、はい。誰とも付き合っていないです」

だが、肩透かしを食わされた。舞風に思い切りぶつけられると思っていた肩は、しかし、ひょいと避けられたのである。想定外の事に、前のめりにすらなりそう

だった。とは言え、心の中で安堵の溜息を吐いたのも事実であった。

「そうだったんですか…よかったです。私、野分さんの事、フリーだと思って、それで手を出してしまったので…実は舞風さんと付き合っていました、って話だったらどうしようかと…」

「浮気になっちゃいますもんね～。いやまあ、浮気って言っても、艦娘は愛人作るのは男の甲斐性みたいなもの多いし…あーでものわっちの場合複雑かぁ」

確かに、舞風の言う通りではあった。基本的に艦娘は現代に蘇った存在であり、基本的なメンタリティは大正昭和のそれである。故に、男が妾を囲うのは、むしろ甲斐性の証であって、不倫とか浮気とかそういう類の話ではない—そう認識している者の方が、圧倒的に多い。

「まあ、のわっちに特定の相手はいないから大丈夫ですよ、安心してください。肉便器なら、いっぱいいますけどね」

くすくすと、悪戯っぽく笑う舞風。

確かに、本人の話を読み出してみると、野分は周囲の艦娘から男役として見られていたようだ。舞風が「のわっちの場合複雑」と言ったのは、複数の女を囲っていたのは野分の方で、その野分を霧島が墮としてしまったから、話がややこしいと…そういう意味だろう。

「肉便器とはまた、凄いい言い方ですね…」

「そうですか～？ 私だって、のわっちの便器ですよ」

あっけらかんと言う舞風の姿に、思わず含んだお茶を吹き出しそうになった。すっとぼけたような事を言うのではなかったと、後悔する。

「のわっちの、お気に入りの肉便器。それが私なんです。勿論、大事な親友でもありますけどネ。よくベッドの上で虐められていますよ、たまに死ぬかと思えますから…♪」

また、くすくすと笑う舞風。悪戯っぽさはそのままに、どこか楽しそうに、愉快そうに…嬉しそうに、笑っている。その笑顔に、霧島は既視感を覚えた。舞風のその笑顔が、野分のそれによく似ていたのである。

野分も時々、こういう笑い方をする。楽しそうに、愉快そうに、嬉しそうに—ご主人様の事が大好きですと、ご主人様に虐めていただけで、ととても嬉しいですと、笑う。それは、主に服従する喜びを表現する、奴隷の笑顔だった。満面の笑みと共に、自らの首輪に付いた鎖を主人に見せる、哀れで、それ故に愛らしい、奴隷の姿である。

ぞくり、と背中を走り抜けていくものがあった。

野分は、霧島の奴隷である。霧島の、肉便器である。その事を、霧島は理解し



ていた筈だった。それこそ毎日のように部屋に呼び出して「使って」いたのだから、理解していない筈がない。

だが、舞風に浮かぶ、野分と同種の笑顔を見た時一生々しい現実を、目の前に突き付けられた気分になったのだ。舞風は、自分が野分の奴隷であると、歓喜を以って認めている。肉便器として「使われる」事に、屈辱どころか、愉悦を見出している。しかしそのご主人様であるところの野分もまた、霧島の奴隷であり、肉便器なのだ。霧島に「使われ」て喜ぶ、便所なのである。

どうしようもないほど、倒錯的な関係だった。野分が肉便器であるなら、舞風は、肉便器のそのまた肉便器だ。これ以下の存在が、この世に存在するだろうか？ 肉便器というだけで既に、人権すら認められない底辺の存在だということに…肉便器の、肉便器とは。

「まあ、だから、便器の癖にご主人様の交友関係に口を出すだなんて、差し出がましいと言えばそうなんですよね。いやー、ほんと我儘な奴隷で、困ったもので…」

たはは、と、また笑う舞風。どうやら、霧島の心中の動きには、気付いていないようだ。恐らく、顔には出ていなかったのだろう。ならば、普通に振る舞うべきだ。

「うーん…いかんせん、私も野分さんに手は出しましたが、あの人の交友関係をあまり把握している訳ではないので」

「あー、そうなんです。のわっちはですね、このブインでは人気の女王様なんですよ」

男役としての野分ばかりが求められる…最初に会った日の居酒屋で、野分はそんな事を言っていた。確かに人気の女王様であれば、そういう事にもなるだろう。

「だから、奴隷を沢山持ってます。のわっちに首絞められたら、嫌がるどころか喜んでイっちゃうような豚を、いっぱい飼ってるんです。…私もそうなんですけどね」

また舞風が、嬉しそうな表情を浮かべる。自分が野分の所有物である事を示す時、彼女はいつでも、嬉しそうに、幸せそうにしていた。

「そうなんです。じゃあ…やっぱり、私が野分さんに手を出したのは、いくらフリーとは言えませんでしたでしょうか？ 私の女王様を組み伏せるなんて、なんて酷い奴…みたいに、思われてしまうってことですよね？」

「あーいえ、そこはいいですよ。霧島さんが恨まれるって事は、まずないと思います。私が昨日暴れたのも、のわっちに対して怒ったからで、霧島さんに対

してどうこうって話じゃないんですよ」

ふむ、と霧島が首を傾げる。

「あれ、でも、さっき私に嫉妬してたって…」

「あー、すみません、話を急ぎすぎちゃいましたね。え〜と、ですね…私としては…あ〜いや、のわっちの奴隷は大体同じように考えてると思いますけど、のわっちにご主人様ができて、むしろ、よかったと思ってるんです。のわっちって、無理してしましたから」

「無理？」

「ええ。結局、のわっちに求められるのって、男役ばかり、ご主人様役ばかり。それをのわっちが苦にしてるっていうのは、判ってる人多いんですよ。でも、私達はのわっちの奴隷で、便器ですから。のわっちに壊れるぐらい乱暴に犯して貰って、少しでもストレスを発散してもらうぐらいしか、できる事はないんです」

舞風笑顔が、一瞬、困ったような、悲しむようなものになる。だが、それはすぐに明るくなった。

「だから、私、誰かいい人がのわっちを女にしてくれないかな、って思ってたんですよ。のわっちを男役から解放してくれる人が現れてくれないかな…って。それは多分、他の奴隷も考えてたと思います。だから、霧島さんにはむしろ、感謝してるんですよ。のわっちが三榛呼びを許してる人なんて、嵐以外は初めて見たぐらいですから」

「？ え？」

「ふふ〜、とぼけなくていいんですよ〜。さっき、三榛って言ってたじゃないですか。あれ、うちののわっちの下の名前ですよね？」

「え、ええと…そう、ですけど…？」

意外な発言の連続に、霧島は戸惑うばかりである。野分を墮としたのはまずかったかと、彼女の所有する便器に糾弾されてしまうかと、そう思ったところに、しかし感謝すると言われ…三榛という呼び方を許してる人は珍しい、と言われる。どちらも、意外な話であった。特に後者は、あの夜、野分の方からそう呼んでくれと言われたものだから、余計である。

「他のところののわちは知らないんですけど、うちののわっちって、下の名前を呼ばせないんですよ。まあ、殆どの艦はそもそも、呼ぼうとしないんですけど…特に、奴隷に呼ばれると物凄く怒るんです。あの名前は、本当の本当に心を許した親友か、それか、のわっちにとっての『オトコ』にしか、呼ばせたくないんだそうです」

その説明に、なるほど、と納得してしまった。確かに、野分にはどこか、乙女なところがある。下の名前は、本当の親友か、運命の人にだけ呼ばれたい—奴隷などには絶対に、呼ばれたくない。その願望もまた、乙女心に通じるものだ。

しかしそうすると、一つ疑問が浮かぶ。

「…え、じゃあ、舞風さんは…？」

「ええ、呼べませんよ。だからいつも、のわっち呼びなんです♪」

舞風が、満面の笑みを浮かべて答える。その光景は衝撃的であり、しかし同時に、霧島を興奮させるものだった。ぞくり、と、その背中を何かが走り抜けていく。先程感じたものと、同種の感覚だ。

「ほんと、三棒呼びしても怒られないのは、嵐ぐらいですね。でも嵐も、親友ってだけですから。のわっちを『オンナ』にしてくれた霧島さんには、感謝しても、しきれませんよ～？ ある日を境に、のわっちが急に生き生きとし始めて…あぁ、いい人見つかったんだな、って、本当に嬉しかったんですから…♪」

その満面の笑みで、彼女は霧島の行為を褒め称える。自らのご主人様を、奴隷に堕とした事を。肉便器に、した事を…しかし、肉便器のそのまた肉便器として、『あるじのあるじ』を賞賛し、感謝している。あまりに倒錯的な光景であった。

「私が嫉妬しちゃったっていうのは、結局、のわっちが霧島さんに夢中になり過ぎちゃって、あまりにも私に構ってくれなくなった、っていう、そこなんです。そりゃあ、のわっちが、男役しか求められてないって事に悩んでたのは知ってますし、その男役を求めてたのは私ですし、だからこそ、のわっちを女にしてくれる人が出てきて、よかったとは思うんですけど…」

「それでも、少しぐらい構ってくれてもいいじゃないか、と？」

「そういう事ですね…」

舞風が、口を尖らせて机に突っ伏する。どこかで見たような光景だ…居酒屋で野分と飲んでいた時に、見たような光景である。ただ、舞風はただ不満だけを持っているという様子ではなく、何処か、罪悪感のようなものを漂わせてもいる。

「そりゃまあ、ご主人様ができて、舞い上がっちゃって…しばらくの間は、そのご主人様に夢中になっちゃうっていうのも、判るんですけど。でも、だからって、自分の奴隷との予定を全部キャンセルして、霧島さんのところに行っちゃうのは、ちょっと、自分勝手、って言うか…」

なるほど、と…そういう事か、と、話が腑に落ちた。野分にご主人様が出来たのは、こちらとしても嬉しい。でもだからと言って、恐らくそれ以前からしていたであろう約束を破って、霧島のところに通い詰めるのは不義理ではないか。舞風の言う事は、一つの道理である。それ故に、昨日、悶着が起きたのであろう。

「なるほど、確かにそれは、自分勝手ではありますね。元から予定が入っていたのを、全部なかった事にする、というのは」

その原因は、霧島にもある。野分が霧島の部屋に来ていたのは、他ならぬ霧島が呼び出したからだ。だが、だからと言って、霧島に責任はあるだろうか？ 霧島は、野分に乞われたのだ。霧島のお手伝いをさせて欲しい、と。昼、霧島の執務中は、これを手伝わせて欲しいし、夜は、「使って」欲しい、と。故に霧島は、手伝えと言ったのだ。使わせると、言ったのだ。

責任は全て、野分にある。

霧島は、右の口角が吊り上がっていく事を自覚していた。だが、どうしても抑える事ができない。にたぁ…♥ と口の端が吊り上がり、笑みを浮かべてしまう。ただの笑顔ではない。暴力的な嗜虐の歡びに満ちた、いやらしい笑みである。同時に、子宮の方から胸に向けて、何かがせりあがってくる感覚もまた、意識していた。それは、物理的に何かを吐き出そうとしているのではない。熱い情欲が…大好きな奴隷を、泣いて許しを乞うまで虐めてやりたいという獸欲が、霧島を支配しつつあった。

「うふふ…♥ これはちょっと、おしおきが必要みたいですね…♥ きつーい、きつーい、おしおきが、ね…♥ ふふふつ、ふつ、うふふつ…♥」

豹変した霧島の様子に、舞風はどう思ったろうか。どんな顔をして、霧島を見ていたのだろうか。霧島には、その時の記憶がない。野分を…三棒をどう虐めるかという事、そして、無様な姿を晒す三棒の姿の妄想。その両者で頭が一杯になっており、舞風は眼中になかったのだ。

再び霧島の意識が舞風に向いた時、彼女は笑っていた。何か、吹っ切れたように。半ば、覚悟を決めたかのように。

しくじった。

起きた時、野分は心の底からそう思った。朝になったらすぐに、ご主人様に…霧島に連絡するつもりだったところを、寝過ごしたのである。

いくら野分が艦娘であり、一種、生まれながらの海軍軍人だと言っても、疲れていれば寝過ごす事はある。増して、このブイン基地は、朝一律で全員を起こすという習慣がない。一応、早朝に総員起こしから集合して体操、というのはあるのだが、何せこのブインは「事情のある者は来なくてよい」という方針である。任務がある者は勿論、前日に用事があって疲れたというような者も、総員起こしには参加しない。そういう場合は、自室における起床ラッパの放送を停止して寝るのである。

野分も昨日は、放送を停止して寝た。それだけ疲れたのだ。昨日は朝から夕方まで霧島の手伝い、加えて、夜は舞風との痴話喧嘩である。昼間の業務もそこに疲れたが、夜の喧嘩は、本当に疲れた。

舞風の部屋に行くと、すぐに喧嘩が始まった。彼女の金切り声が、まだ耳に残っている。その艶やかな金髪を揺らしながら、しかし、肩を震わせ、一方で目に涙を浮かべて怒鳴っている姿が目浮かぶ。

「ねえ、何なの！？ 霧島さんって、野分の何なのよ！」

そんな事を、舞風は言っていた。

考えてみれば、野分も悪いのだ。霧島というご主人様を得てからというもの、以前からの『客』一肉便器との予定を全てキャンセルして、霧島のところに通っていたのだから。嫉妬されて当然である。

だから、痴話喧嘩と言っても、怒鳴っていたのは舞風ばかりで、野分は終始、なだめる側に回っていた。努めて優しい笑顔を浮かべ、穏やかな言葉をかけた。舞風をなだめ、すかし、たしなめた。

無論、その笑顔は作り笑いだっただけ。怒鳴られて、それで自然に笑顔を浮かべられるような人間は、そうはいない。だが、野分の笑顔が無理に作ったものである事実に、舞風は気付かなかった。それだけ激昂していたのだ。そこまで激昂するほど、舞風をぞんざいに扱ってしまったのだ—そう思うと、気が重かった。

だから、肉体的にと言うよりは、精神的に疲れたらしい。喧嘩の後は仲直りという事で宅飲み、そこからセックスにまでもつれこんだから、たまらなかった。結局、自分の部屋に帰った頃には、日付も変わろうとしていた。霧島の携帯端末に、明日詳しい事を話す旨メッセージを送ると、総員起こしの放送を止め、泥のように眠ったのである。携帯端末の目覚まし時計だけかけておいて、霧島が朝食を摂ったであろう頃を見計らって連絡しよう、という訳である。

そうしたら、目覚まし時計の音では起きず、寝過ぎてしまったのだ。

「はあーっ…」

野分は、瞑目して深く溜息を吐いた。今日は霧島の休日に合わせ、彼女も私服である。第二ボタンまで掛けた半袖のカッターシャツに、明るいグレーの夏用スラックスといういで立ちだ。

その野分が、再び顔を上げて周囲を見回す。まだ引越してきて間もない、霧島の寝室である。3LDK という、戦地とは思えない贅沢なその個室にはまだ、飾り気はない。寝室のみならず、他の部屋にもダンボールが積まれている状態だ。最低限必要な荷物ぐらいいかまだ、ダンボールから出していないのである。霧島はブインに来てからすぐ、開隊に向けて仕事を始めてしまったため、身を落ち着

ける時間もなかったのだ。そのまま、ずるずると時間だけが過ぎてしまったのである。

しかしそれでも、霧島の部屋だ。大好きな、ご主人様の部屋だ。しかも、その寝室である。朝起きてからずっと持っていた、しくじったという意識が少しずつ鳴りを潜め、霧島への愛が、ご主人様への情熱が、鎌首をもたげてくる。

野分が十時過ぎに目を覚ました後、携帯端末を見ると、既に霧島からのメッセージが来ていた。慌てて連絡を入れると、それなら軽く何か食べてから、先に部屋に行っておいてくれ、寝室あたりで待っていてくれればいいから…という旨のメッセージが返ってきた。確かに野分は、霧島の部屋の合鍵を持っている。こういう時のためのものだ。その信頼を嬉しく思うと、野分は朝昼兼用の食事を済ませ、霧島の部屋に出向いたのだ。

愛しいご主人様の部屋、それも寝室に、一人。それだけで、野分の情欲が盛り上がってくる。はしたないと判っていても、止められない。それだけ、霧島の事が好きなのだ。ご主人様の事が。今の野分にとって、霧島は全てであった。命を含めて、全てを捧げたいと本気で思っていた。もしそれが許されるのであれば、だが。

そんな大好きなご主人様の寝室、そのベッドの上に一人座っている訳だから、どうしても興奮を抑えられず、発情してしまう。何せ、野分は人間ではないのだ。これは、艦娘だという意味ではない。今の野分は、肉便器であった。霧島が性処理に使う、肉便器である。

肉便器は、いついかなる時でも、ご主人様に求められれば即座に、性処理に応じなければならない。故に、ご主人様の近くにいる時、肉便器はいつでも発情できなければならない。濡れていない便器穴など、ご主人様が気持ちよくなれないからだ。無論、ご主人様が毎回、下の穴を使うとは限らない。お口を使う場合も多い。しかし、肉便器であるならば、どの穴を使われてもいようにしなければならない。

であれば、だ。

ご主人様の寝室にいる、ご主人様のベッドの上に座っている、ただそれだけで発情してしまうのも、致し方のない事ではないだろうか？ ご主人様のベッドの上など、まさに、ご主人様に「使って」いただくための場所だ。そういう場所で発情しない肉便器など、欠陥品でしかない。ここで発情せずして、何処で発情すると言うのだ。

一だから、野分は悪くない。

情欲が、肉欲が、淫欲が、野分の思考を溶かしつつあった。

冷静に考えれば、今の自分がどういう状況にあるか、野分にも理解できただろう。ご主人様が部屋で待っていると言ったのに、一人で勝手に発情するというのは、いかにも不味い話だ。霧島が気分を害してもおかしくない。

だが、野分はもう、そんな当たり前の事すら理解できなくなっていた。どんどんどんどん、思考が自分勝手になっていく。発情しているという事実を、正当化する事しか考えられない。

ご主人様なら、野分をこんな場所に放置すればどうなるか、気付けた筈だ。

だから、野分は悪くない。

我慢できる筈がないと判っていて、ここに放置したのだから。

いや、考え方を変えてみよう。

そうだ、聡明なご主人様は、野分が発情すると判った上で寝室を指定したのだ。

つまり、野分が発情する事を、ご主人様は望んでいるのだ。

寝室で待っているというのは、発情して待っているという意味なのだ。

その身勝手な思考はしかし、実を言えば、一面の真実を引き当てていた。だが、野分がその事に気付くのは、後の話である。今はもう、それどころではなかった。霧島のベッド、その布団の上に突っ伏し、枕に顔を突っ込んで深く息を吸う。

「すうー…♥ はぁ～…♥ すう～…♥ はぁ～……♥」

霧島が普段、使っている枕だ。霧島は毎日、この枕に頭を載せて寝ているのである。だから顔をうずめて深く息を吸えば、濃厚な霧島の香りが鼻腔に満たされる。

霧島の体臭がきついか、そういう話ではない。霧島もまた艦娘であり、人間であるからには、どうしても身体からある種の香りがする。霧島の肉便器を自任する野分からしてみれば、その匂いは得も言われぬ快感を呼び覚ますものであり、一種の媚香ですらあった。

「ご主人様あ…♥ ご主人様、ご主人様、ご主人様あ…♥ 好きい…♥ ご主人様あ…♥ 好き、好き、好きいつ…♥」

傍にご主人様がいる訳でもないのに、枕に埋めた口から発情したメスの台詞が漏れてくる。それは、誰かに聞かせるためのものではなく、自分に聞かせるための台詞であった。言う必要もないのに、殊更にご主人様への思慕を口にし、とりとめのない愛の言葉を自らの耳に入れる事で、より興奮を高めている。

ここまで来てしまっってはもう、戻れない。

野分は、乱雑に服を脱ぎ始めた。もぞもぞと、何処かもどかしそうにすら感じられる。実際、もどかしかったろう。何故自分は、こんな服など着ているのだろうか？ おかしいではないか？ 便器なのに。肉便器なのに。何で、恰好つけた

服など、着ているのだ？ 便器が服を着るか？ 豚が服を着るか？ そんな訳がない。こんな邪魔なもの、どうして着ているのだ。

「んうっ…♥ あっ、ああっ…♥」

カッターシャツのボタンを外して前を開け、一方でベルトを緩めてスラックスのボタンを外し、ジッパーを下げる。ランニングシャツの下から左手を差し入れて自らの控え目な胸を揉み、一方で、開いたスラックスの前面から、ショーツの中に右手を差し入れる。うつ伏せになって霧島の枕に頭を突っ込み、腰を浮かせて、両手でオナニーしている格好である。

本当は、全て脱いでしまおうと思った。この邪魔な服を、脱いでしまおうと思った。だが、脱ぐ時間すらもったいなく感じられたし—それに、この邪魔な拘束具が、逆に野分を興奮させていた。

そう、拘束具だ。

服があるから、思うように指が使えない。気持ちいいところを、好きなように刺激できない。だが、その事実が逆に、野分を燃え上がらせる。

まるで、ご主人様に拘束されてしまったかのような気分だった。ご主人様に強制的に発情させられ、しかし、思うように気持ちいいオナニーができない恰好をさせられて…その上で無様にオナってみせろと言われたかのような、そんな感覚である。

「ああ、ご主人様あ…♥」

目の前にいない、しかし愛しの主を呼ぶ野分。既に秘部はたっぷり濡れてショーツを濡らし、陰唇をなぞるだけで痺れるような快感が全身へ駆け巡る。一方で、その控え目な胸の乳首は硬くしこっており、指先で摘まんで軽く左右にねじってやると、また刺激的な快感が伝わってくる。

「ご主人様あ、見てえ、見てえ…♥ 三榛を見てください…♥ お願いします…♥ 三榛は、ご主人様のベッドにいてだけで発情してオナってしまう、どうしようもないマゾ豚です…♥ ご主人様あ…♥ 三榛の無様なオナニー、見てください…♥」

いもしないご主人様への呼びかけは続く。野分がいくら呼びかけても、霧島は答えない。この部屋にいないからだ。それは、野分にも判っている。だがもし、この部屋に霧島がいたら。横で、芋虫のようにもぞもぞと動く彼女の姿を見ていたら。

想像するだけで、イってしまいそうになる。霧島は、どんな目で見えてくれるだろうか。冷たい、見下すような—ゴミを見るような目でだろうか。…いや、それはないだろう。ご主人様は、肉便器をそういう目では見ない。代わりに…そうだ。



あの目だ。蔑みと昂奮が入り混じった、不思議な目。間違いなく野分を蔑んでいるのに、しかしその瞳は冷たくはなく一むしろ、この無様な肉便器によって性欲を満たさんとする、淫猥な目である。

「ああっ…♥ ご主人様あ…♥ もっと、もっと見てえっ…♥」

あの目で見られると、野分はどうしようもなく昂ってしまう。自分は、あの人の玩具に過ぎないのだと…雌豚なのだ、肉便器なのだ、どうしようもないほどに自覚させられてしまう。

あの人の前では、野分は人間ではなかった。野分は、人間もどきでしかなかった。人間の姿をかたどった、便器。いわば、肉でできた、意思あるタッチワイフ—もしくは、セクサロイドである。

野分には、セックス以外に存在意義はなかった。霧島の性欲を処理する、それ以外、何の価値もない。その整った顔も、控え目な胸も、霧島の淫欲を掻き立て、セックスの準備をするためにしか、存在していない。その口も、膣も、霧島のちんぽを挿入するためだけの存在だ。霧島の、ちんぽしごき用の穴である。

そう、野分は、穴のついた人形でしかないのだ。口と膣…それに、霧島は使おうとしないが、肛門。その三種の、ちんぽしごき専用の穴こそ、野分の本質だった。その穴に霧島のちんぽが突っ込まれ、霧島が気持ちよくなる。気持ちよく、精液を排泄する。野分の価値は、究極、そこにしかない。

「ご主人様あ…ご主人様あ…っ♥」

そういう事を考えると、野分の全身に、歓喜と快感が走り抜けていく。屈辱でも、苦痛でもない。それは間違いなく歓喜であり、快感であった。

ご主人様の道具になる事。

ご主人様の、玩具であるという事実。

それは本来、屈辱的な物である。人権も何もない、ただの奴隷として、便器として誰かに仕えるというのは、間違いなく屈辱である。だが、その屈辱こそ、野分が求めていたものだ。

「お便所にしてえ…♥ ご主人様あ…♥ ご主人様のお便所になりたいよお…♥ 便器にしてえ…♥ 便器、便器い…♥」

彼女自身、こんな自己破壊願望とも言えるような欲求を秘めているとは思っていなかった。霧島と出会う前の彼女は、ただ、女として扱われたいと思っているだけだった。頼れる男役はもう嫌だ、頼る女役がいい、という訳である。

男役は、どうしても気を使わなければならない。女が何を求めているのか、何をされると喜ぶのか、考えなければならないのだ。それは、サービス業を思わせる役割だった。女の我儘を読み取り、彼女の求める最高のサービスを提供してや

らねばならなかった。セックスですら、そうだった。自分の欲望を制御し、女が喜ぶような形で、セックスという任務を遂行しなければならなかった。

だが、霧島の前では違った。ご主人様の前では、野分は好きなように振る舞ってよかった。首を絞められれば、好きなだけ、苦しんでよかった。ちんぼを口に突っ込まれれば、好きなだけ涙を流し、無様な顔を晒してよかった。膣に挿入されて激しく肉穴をほじられれば、好きなだけけがり、嬌声をあげ、だらしないうへ顔を晒してよかった。

「えへ、へへへ…ご主人様あ…♥」

霧島の前でだけ、野分は自分を解放する事ができた。ここまでの事は、舞風の前でもできなかつたし、嵐の前ですら、できなかつた。確かに、舞風の事は好きか嫌いかと問われたら、大好きだと答えるぐらいには、彼女を気に入っている。何度も身体を重ね、激しく愛し合った。同様に、嵐の事は、唯一無二の親友だと思っている。嵐になら、誰にも言えなかつたような悩み事でも、相談できた。

なら、舞風にこんな姿を見せられるのか？

嵐の前で、だらしないうへ顔を晒し、媚びる事ができるのか？

できる訳がない。

野分がこうなれるのは、霧島の前でだけだった。霧島だけが、野分を解放してくれる。何をしても、許してくれる。無様な野分も、惨めな野分も、だらしないうへ野分も、全て受け入れてくれる。

霧島はいわば、野分にとっての神だった。霧島にとっての木曾がそうであるように、野分にとっての霧島は、唯一絶対の神であった。自らの全てを捧げて惜しまないどころか、むしろ積極的に捧げたいと思う、その対象である。

「んあつ…♥ きもちい…♥ ご主人様…♥ 気持ちいいです…♥ おっぱいも、おまんこも、気持ちいいのお…♥」

まるで幼児のような言葉。オナニーを見て欲しいと言い、今またおっぱいとかおまんこか言って不在の霧島に話しかける野分は、公園の砂場で砂の城を作り、親に見て貰おうとする幼児と変わらない。

それでもいいのだ。霧島の前でなら。霧島だけは、どんな自分でも受け入れてくれる。野分には、その確信がある。だからこそ全てをさらけ出し、のみならずもっと見て欲しいとねだり、また、いやらしい言葉をまき散らすのだ。

「駄目…♥ もう駄目、我慢、できない…♥」

身体を起こし、ベッドの上に座るような格好になった野分は、改めて服を脱ぎ始めた。前を開けていたカッターシャツを脱ぎ捨てると、シャツの下にあったランニングも放り投げる。スラックスは、ショーツごと脱いだかと思うと、やはり

ベッドの下に捨てる。

「ご主人様…♥ ご主人様、早く帰ってきてえ…♥ 見て欲しいの…♥ 私の身体、見てください…♥ 私の、貧相な身体…♥」

全裸になった野分は、今度は仰向けになって、オナニーを再開する。先程と同様、左手を乳房に、右手を秘部に。だが、邪魔な布がなくなった分、そのオナニーは激しく、野分の得る快感も多い。

「んいっ…♥ ご主人様、こんな貧相な身体の奴隷で、ごめんなさい…♥ こんなにおっぱい、小さくて…女としての魅力、全然ないですよね…♥ 本当に、ごめんなさい…♥」

右手の薬指、その腹をクリトリスの上に押し付け、皮の上から潰す。潰したまま円を描き、ぐりぐりと刺激と刺激すると、下腹部から脳にまで電撃が走り抜けていく。思わず声が出るが、しかし、ご主人様への呼びかけは止まらない。

「たくさん、罵ってください…♥ この貧相な身体、馬鹿にしてほしい…♥ サンドバッグにしてください…♥ ご主人様が好きなだけ虐められる、サンドバッグ…♥」

快感に身体をくねらせながら、また、いもしないご主人様に向かってねだる。馬鹿にしてほしいと。オスとしてならともかく、メスとしての魅力は全くない細身の身体を、しかし、女として見て欲しいと。使えないメスとしてでいい—私を女として見て欲しいと、野分はねだっていた。

そのためになら、精神的なサンドバッグになってもいい。ただひたすら、言葉の暴力を叩き付けられるだけのサンドバッグになってもいいと…いや、そうになりたい、と。彼女の言葉は、そんな複雑な、倒錯した胸懷を語っていた。

「んあっ…♥ んう、んっ…♥」

その光景を、想像してしまったのだろうか。ご主人様に罵られる自分を、幻視したのだろうか。目をきつく瞑った野分の身体が、大きく跳ねた。同時に、胸を弄っていた左手は、自らが貧相と表現した乳房を—実際、鼻真目に見ても B カップ程度、AAA と馬鹿にされる事も充分ありえる、「控え目」な胸を一思い切り握り潰した。

その様子を擬音で表すなら、「ぎゅう」では足りない。「ぎりぎり」あたりが適切だ。それほどまでに…自らの胸を呪い、壊そうとするかのように、思い切り潰す。それは痛みを伴うものだったろう。だが野分にとってそれは、快感でしかなかった。ご主人様から下賜されるお仕置だと、錯覚しているのかもしれない。

「ご主人様っ、ご主人様っ、ご主人様あっ…♥ ああ、いきそっ…♥」

その行為は、大きな波の呼び水となった。絶頂に向かう津波が打ち寄せ、野分

の理性を溶かしていく。乳首を摘まんで指先で潰し、ぐちゅぐちゅと音を立てて秘部を掻き回し、打ち寄せる快感の波が、野分の全てを押し流していく。彼女の全てが、肉欲に屈服する。

「イクっ、イクっ、イクうっ…♥ イく、イっ…!♥ んんうーっ…!♥」

顎が天井に向くほど上を向いて、ぴく、ぴくっ♥ と、小さい痙攣を繰り返す野分。くぐもった声は、自ら望んで押し殺したというよりは、絶頂の快楽という波に、嬌声も一緒に押し流された…といった風情である。歯を食いしばってその奔流に耐える彼女は、女の欲びに打ち震えていた。霧島というご主人様に出会うまでは味わえなかった、メスの欲びである。

「はあっ、はあっ…♥」

悦楽の津波が去りつつあった。その奔流の中、じっと身を縮めて耐えていた野分は今、余韻に浸りながら息を吐いている。息をする度に腹が上下するような、荒い息である。満足だった。ご主人様のベッドでオナニーし、メスの欲びに満たされながら、その余韻までも楽しむ…ついこの間までは、想像もできなかった贅沢であった。

「…？」

ふと、何かがおかしい気がした。

誰もいない筈の霧島の部屋。その寝室。野分以外は存在しない筈のこの部屋に、しかし、人の気配を感じたのである。単なる思い過ごしだろうか？ 気のせいなのか、そうでないのか…もぞもぞと動いて、寝室の入口を見やると、それが思い過ごしなどでない事ははっきりした。

「み～は～る～…♪」

そこにいたのは、霧島だった。右側の口角を吊り上げ、いやらしい嗜虐の笑みを浮かべた、霧島。私服の浴衣姿である。あの若竹色と常盤色の市松模様が入った浴衣は彼女のお気に入りの一着であると、野分は知っていた。

「あは…♥ ご主人様…♥ ご主人様、ご主人様…♥」

大好きなご主人様に、甘えるように、媚びるように…何度も何度もその名を呼ぶ。自宅に帰ってきた主人を出迎える犬のような視線を送りながら、もぞもぞと、まるで芋虫が動くかのように、身体をくねらせる。その動作は一種、犬が振る尻尾に近いものであったろう。

「ああ、ご主人様…♥ 会いたかったです…♥ ごしゅ……？」

だが、その動作がびたっと止まった。何か見てはいけないモノを見てしまったかのような、そういう反応だ。甘えた視線を霧島に送っていた目は、驚きのあまり点となってソレを見詰めている。大好きなご主人様を呼ぶ事すら、突然忘れて

しまったかのように、中絶させられた。

だが、それも無理はなかった。

「やっほー、のわっち〜…♪」

よく知った、楽しそうな笑顔がそこにあった。どこかとぼけたようで、しかし愉快そうなあの笑顔を、野分は知っている。そう…よく知っている。野分の大事な人。恋人かと聞かれたら、違うと答える。親友かと言われると、それも違う気がして首を捻る。だが、大事な人には変わらない。

「まい…かぜ…？」

野分の唇が、ゆっくりと動く。信じられない、といった様子で、ぼそりと、その名を呼ぶ。舞風。そう、舞風。野分の大事な人。踊りと笑顔がよく似合う、金髪の艦娘。名を呼ばれた本人とは言えば、変わらず愉快そうな笑顔を浮かべたまま、野分に向かってウインクしている。

最初、驚愕にのみ歪んでいた野分の顔は、やがて違う成分を帯び始めた。恐怖しているような、怯えているような…そういう成分である。引きつった顔で舞風を見るその表情は、まるで、三流のホラー映画の登場人物のようですらある。怪物を目の前にし、来るな、来るな、と叫んで恐怖する、哀れな犠牲者の顔だ。

「…やだ…やだ、やだっ！ 見ないで、見ないでえっ！」

どうして見られたくないのか、それは野分自身にも判らなかつた。つい先程、ご主人様への愛と快樂で一度押し流されたばかりの理性では、その理由を分析する事はできなかつた。ただただ、舞風に今の自分の姿を見られたくなかつた。彼女に見られる事は、今の野分にとっては恐怖であつた。

自分が自分でなくなってしまうような感覚。自分の足元が崖に変わり、その崖が崩れていくような感覚。自らの皮膚が、まるで仮面を剥がすかのように剥ぎ取られていく感覚。

野分にとって、今、舞風に見られるというのは、そういう感覚を惹起するものであつた。

「やだっ、やだっ…！ …！ ……？」

青ざめた顔で震えていた野分は、しかし、突然の感覚に目を丸くした。何が起きたのか、すぐには理解できなかつた。数秒経ってようやく、霧島が抱きしめてくれているのだと気付いた。

それほどまでに、彼女の恐慌状態は酷いものだったのである。大好きなご主人様を眼中から消し去り、その行動を一切知覚できないほどに。完全に、我を失っていたのだ。

「大丈夫ですよ、三榛」

耳元で、霧島が優しく囁いた。猫撫で声という訳ではない。慈愛に満ちた、ただただ優しい声。温かみすら感じる、柔らかで静やかな声であった。野分の背中に回された霧島の両手は、片方が彼女を抱きしめ、もう片方が、ゆっくりと背中を撫でている。

「大丈夫、大丈夫…」

霧島という偉大な存在に、偉大なご主人様に、野分の心は急速に落ち着きを取り戻しつつあった。やはり、ご主人様は素晴らしい人だ。パニックを起こした自分を、こんなに簡単に落ち着ける事が出来るのだから。霧島に対する畏敬の念、尊敬の念、感謝の念…そういったものが、改めて湧き上がってくる。

「…あの、その…ごめんなさい」

恥ずかしそうに、野分がぼそりと呟く。ついさっきまであれほど青ざめていた顔が、今はかすかに赤い。

「いいんですよ。私も、ちょっと意地悪でしたね。まあ…これからもっと、意地悪するんですけども…♪」

一方の霧島は、野分が落ち着いたので確認すると、両手を離して身体も少し引き、にっこりと笑顔を向ける。その笑顔に、野分もまた、力なく笑顔を返した。その様子を、ベッドの脇で舞風が眺めている。楽しそうに—いつ踊り出してもおかしくないような、そんな様子だった。

「今日はね、三榛。お仕置しようと思ってるんですよ」

その優しい笑顔を崩さぬまま、霧島が言う。

「お仕置、ですか…？」

「ええ。今日の朝早く、舞風さんが来て…昨日何があったか、全部教えてくれたんです」

落ち着きを取り戻しつつあった野分だったが、その説明には多少、動揺した。まさか、舞風の方から霧島の部屋に向向き、説明するとは…正直、予想もしていなかった。だが、そのお陰である程度、疑問も解けた。どうして舞風が霧島の部屋にいるのか、その理由の一端は、理解できた。

「ふふっ…三榛ったら、自分の肉便器ちゃんを寂しがらせちゃ、いけませんよ？ ちゃあんと、管理しなきゃ…♪ ご主人様のご主人様に嫉妬させるような真似は、ご主人様としても、奴隷としても、失格ですからね？」

霧島の笑顔の性質が、変わった。野分を優しく包み込むような、慈母のような成分は鳴りを潜め…代わりに、愉快そうな成分が顔を出した。ただ、同じ楽しそうな笑顔でも、舞風のそれと同種ではない。舞風の無邪気な笑顔と違い、霧島の笑顔は一邪気を、明らかに含んでいた。

「その…はい、ごめんなさい…」

しゅん、という擬音がよく似合う様子で目を伏せる野分。実際、それは霧島の言う通りだった。恐らく、舞風はありのままを全て、伝えたのだろう。嘘偽りなく、誇張も矮小化もせず、話したのだろう。ならば、野分が付け加える事も、訂正する事もない。ただ認めて、謝罪の言葉を口にするだけだった。

実際、野分は霧島というご主人様に夢中になるあまり、自らの肉便器の管理をないがしろにし…結果として、奴隷達にも、霧島にも迷惑をかけた。ご主人様に迷惑をかけるなど、肉便器失格である。一方で、自らの奴隷の管理もできないようであれば、ご主人様失格である。霧島の言う事は、いちいちもつともだった。

「それだけ反省してるなら、お説教は要りませんね。なら後は、お仕置だけ、ですね…ご褒美になっちゃうかもですけど♪」

霧島が横を向いて、その邪な笑顔を舞風に向ける。向けられた舞風は、変わらず、無垢で無邪気な笑顔を浮かべていた。楽しそうに、首をかしげる。

「楽しみです♪」

本当に楽しそうな舞風の声に、野分はうろたえる。ご主人様にお仕置されるのはいい。それは当然の話だ。だが、舞風も一緒となると、狼狽せざるを得ない。舞風とは、一度もそういう関係になった事はないのだ。いや…舞風のみならず、霧島以外とは誰とも、そういう関係になった事はない。野分を『女』とする関係を結んだ事は、ないのだ。

「ふふふっ…♪ 舞風さんがいると、困るんですか、三棹？」

「え〜？♪ それは私、傷付いちやうなあ〜…♪」

「え、あ、い、いや、その…」

ただでさえ狼狽しているところに、霧島と舞風、二人がかりで畳みかけられては、しどろもどろになるしかなかった。元々目を伏せていた野分だったが、もう、自分からは顔を上げられない。だが、霧島がその顎に手をやると、くいつとやって上を向かせる。霧島の目は野分の瞳を、野分の目は霧島の瞳を、それぞれ見詰める。

「いいですか、これはお仕置です。たっぷり、酷い事をしてあげます。…ふふっ…それに、想像してご覧なさい？ 三棹が私に虐められて、いつもみたいに無様な姿を晒して…それを全部、舞風さんに見られちゃうんですよ？ 大好きな、舞風さんに。ふふふっ…とっても屈辱的で…興奮しませんか？♥」

にたあ…♥ と、霧島が口角を吊り上げた。その表情に野分は、ぶるっ、と身体を震わせた。寒気を感じたのだ。嗜虐の悦びをたたえた霧島の表情はそれだけおぞましく、恐れ、不安といった、根源的な恐怖を呼び起こした。

だが、それだけだろうか？ 大好きなご主人様の、その悦びに満ちた顔を見て、本当に恐れだけを感じたのだろうか？ 数秒経って、野分は気付いた。自分は、悦んでいるのだと。身の内から湧き上がってくる悦びが全身を包み、それでも足りずに溢れ出続けているのだと。

霧島に虐められる。それは、この上ない悦びだ。このベッドの上で自らを慰めながらも渴望したものだ。霧島だけが与えてくれるメスの悦びを、全身で、これでもかと言うほどに浴びる。そして、メスの本性を現し、思う存分自分を解放する。その様子を霧島に見て貰い、より責め立てて貰い、野分は、全てを霧島へ捧げる。

それは、毎日のように霧島の部屋で行われている事だ。想像するだけで絶頂を迎えてしまいそうな、最高の快樂だ。だからこそ、野分は自分の肉便器どもを放り出し、自らの快樂だけを求めて、霧島に溺れたのだ。

霧島は、それをこれからやろうと言う。愛の交歓をしようと言う。それも、いつも通りやるだけではなく一舞風に見て貰おうと言う。

見られる？

メスの本性を剥き出しにした自分を、見られる？

舞風に？

大好きな、舞風に？

一番の、肉便器に？

ご主人様がメスの本性を解放し、ご主人様のご主人様に屈服する姿を？

肉便器に、見られる？

野分は、恐怖した。それは間違いなく、霧島の言葉と笑顔が呼び覚ましたものだった。だが、その言葉と笑顔が直接、怖かったのではない。野分が怖かったのは、身の内から湧き上がってくる、この悦びだった。

野分は、想像してしまったのだ。ご主人様が、ご主人様のご主人様に屈服させられ、その姿を肉便器に見られるという、どうしようもないほどの屈辱を。その屈辱が味合わせてくれる、極上の快樂を。

「うふふっ…♥ 三棒ったら、そんなにプルプルしちゃって…可愛いですね♥ 期待、しちゃってるんですね？♥ いい子です…♥」

気付けば、震えが止まらなくなっていた。全身が震え、歯ががちかちと鳴る。霧島がもう一度、両手を背中に回して抱きしめてくれるが、それでも震えは収まらない。だと言うのに、野分の顔は、だらしなく弛緩していた。まるで阿片でも吸ったかのように、口を半開きにして、恍惚とした表情を浮かべている。妄想だけで、イってしまったとでも言うのだろうか。その様子に、舞風もまた、満面の



笑みを維持する。

「たーのしみ…♪」

その舞風の声に、びくんっ、と野分の身体が跳ねた。まるで、痙攣するように。野分は、自分が惨めで仕方なかった。本来なら、野分はオスであり、舞風はメスだ。野分の性器を舐めさせ、また頭を踏みつけても、舞風は悦んで嬌声をあげ、媚びた視線を送ってくる。二人は本来、そういう関係なのだ。

だが、今は違う。

「ふふ…♥ ほーら、三榛?♥ いつまで、そうしてるんですか?♥ ご主人様の許可もないのに、いつまでベッドの上にいるつもりなんです?♥ 便器らしく、ご挨拶とおねだり、してもらわないと困りますよ?♥」

再び身体を野分から離れた霧島が、ベッドの上に座る形から、ベッドに腰掛ける形へ移行する。

霧島の求める事は、判る。彼女は、行動でも、言葉でも、ベッドから降りると言っていた。ベッドから降り、フローリングに直接座れと。そして、おねだりしろと。

普段なら、言われるまでもなく、率先してやる事だ。だが今は、怖かった。舞風が、見ている。大好きなご主人様が、ご主人様のご主人様の前で肉便器に墮ちるところを、今か今かと待っている。それが、怖い。その姿を見られた時、自分がおかしくなってしまうようで…怖い。

「は、い…♥」

だが、野分はその恐怖に震えながら、それでも動いた。普通の機敏さは何処にもない、緩慢で、ぎこちない動きであったが…それでも、ベッドから降りた。その時になって初めて、野分は、自らの秘部が酷い有様になっていると知った。

勿論、先程までオナニーしていたのだ。まして一度は絶頂を迎えたのだから、秘部が濡れているのは当然である。ただ、彼女の秘部は今、それにしても酷い有様だったとしか、形容の仕様がなかった。白みを帯びた本気汁が溢れ、内腿がべちょべちょになっている。

ベッドに腰掛けた霧島、その目の前に移動し、改めて正座する。そうすれば、秘部と両足の太腿が密着し、いよいよ、その事実を野分に自覚させる。自らの秘部が愛液を大量に分泌し、太腿までどろどろに汚しているという、事実を。

それでも、野分は止まらない。いや、止まらない。ここまで来て、止まるという選択肢はない。正面から自分を見るご主人様の視線だけでなく、脇から、こちらを楽しそうに観察している舞風のそれをも感じながら、野分は、両手を床に突いた。次いで、ゆっくりと頭を下げ…やがて額が、フローリングに擦り付けられ

る。

「ごっ…ご主人、様…！♥ どう、か…♥ この、下品で、いやらしい、雌豚を…！♥ 肉便器を、使ってください…！♥ 私は、私はっ…！♥ ご主人様の、肉便器、ですうっ…！♥」

品のない台詞だった。ただ下品というだけでなく、どうもまとまりがなく、いやらしさも今一つである。やり直しを要求されても仕方のない、無様なおねだりだ。実際、普段の野分—メスではなく、オスとしての野分—なら、やり直しを要求したかもしれない。

だが、今の彼女には、これが精一杯だった。今だぶるぶると全身を震わせながら、ぎこちなく土下座した野分には、気の利いた台詞など浮かぶ筈もない。ご主人様に服従する欲び、メスの本性をご主人様に晒す欲び、そして、そんな雌豚としての姿を、舞風というお気に入りの肉便器に観察される羞恥心。もう、野分の頭は限界だった。洪水のように押し寄せる感情の奔流に、耐えられなかった。

「…あ……」

間抜けな声が漏れた。その声が誰のものか、野分には判らなかつた。自分の声だったような気もするし…霧島の声だったような気も、舞風の声だったような気もする。

だが、自らの肌の感覚は、疑いようがなかつた。野分は、自らの下半身が次々に濡れていくのを自覚していた。大量に分泌された愛液が、秘部のみならずその周囲を汚している事には、元から気付いていたが…これは、そういう次元ではない。秘部から流れ出した液体が、太腿を伝い、脹脛を濡らす。それは地面にまで届いて、脛や足の甲をも濡らしながら、フローリングに水溜まりを作っていく。

そう。

野分は、失禁していた。ちよろろ…と、黄色がかかった透明な液体が、秘部から流れ出していく。とめどなく流れるその液体は、土下座して額を地面についた野分を容赦なく汚し、また、彼女という存在を貶めていく。

何せ、その光景を見ているのは、霧島だけではない。舞風もまた、野分を見ているのだ。霧島の前で土下座し、品のない台詞でおねだりし…あまつさえ失禁してしまった、哀れで無様なご主人様の、その姿を。

「ああ、あ、あっ、あああ…ああ、あああ……」

先程の間の抜けた声は、野分には、誰のものか判らなかつた。だが、その後部屋に響き始めた嗚咽は、間違いなく自分自身のものだど理解できた。理解できたからと言って、何の慰めにもならなかつたが。

「あゝ あゝ っ、あゝ っ、あゝ ー…！ あゝ ーっ、あゝ ーっ……！」

最初は嗚咽だったものが、やがて号泣に変わる。野分は土下座の姿勢のまま、動く事もできず、ただただ泣いていた。声をあげ、人目も憚らず、叫び泣いていた。ご主人様の部屋で、しかもご主人様の目の前で…肉便器にも見られながら、失禁したのである。今更なるものなど、何もなかった。

「あゝ あゝ あゝ っ…！ あゝ、あゝ ー…！ あゝ ーっ、あゝ あゝ ーっ…！」

やがて、土下座の体勢が崩れる。正座したまま、上半身だけを床に突っ伏して、泣いているような姿勢になった。そのまま、泣きじゃくる。恥も外聞もなく、子供のように。

野分の心は、麻のように乱れていた。もう、何故自分が泣いているのかすら、判らなかつた。ただただ、怖かつた。ご主人様に、失望されるのが—ご主人様に嫌われるのが、恐ろしかったのだ。

確かに野分は、何度となくご主人様に罵倒されてきた。メスとしての本性を晒し、その浅ましさを罵倒されてきた。だがその罵り言葉は、霧島が野分に失望したために出たものではない。むしろ、野分の無様な姿に喜んでいるから、いよいよ野分を辱めてやろうと、喜ばせてやろうと、そういう意図から出たものなのだ。彼女の罵り言葉は、もっと惨めな姿を見せろと、そういう意味なのである。霧島は、野分のメスの本性を喜んでくれる人なのだ。

だが、これは一出来の悪いおねだりに加えて、まだプレイが始まった訳でもないので、失禁するというのは、いかにも、ご主人様を失望させそうな失態である。

これが、散々首を絞められながらセックスした結果、失禁した…とかなら、こんな事態にはならなかつたらう。それはある程度致し方のない事であり、また、霧島を興奮させるスパイスにすらなり得たらう。

しかし現実には、野分は、霧島に見限られてもおかしくない失態を犯してしまったのだ。霧島に見捨てられたら、もう、死ぬしかない。野分にとって、霧島は全てだからだ。霧島のいない人生になど、何の価値もない。本気でそう思っていた。故に、泣くしかなかつたのである。

不意に、頭に痛みが走った。ややあって、髪を掴まれているのだと判った。霧島が野分の銀髪を引っ掴み、上に引っ張って持ち上げているのだ。涙でぼやけた視界に、愛しのご主人様の身体が—霧島の身体が映る。いつの間にか彼女は、浴衣を脱いでいた。最初から着けていなかったのか、それとも脱いだのか、下着も見当たらない。ガチガチに勃起したふたなりおちんぼが目に入ったかと思えば、そのまま持ち上げられ続け—やがて、ご主人様の顔が見える。

「みーは一はる…♥」

その顔は、野分に、三榛に失望したような顔ではなかつた。先程からして既に

浮かんでいた、あの邪な成分を前面に押し出した、邪悪な笑顔だった。目の前のメスが可愛くてたまらない、壊れるまで可愛がってやりたい、という…そういう顔であった。

「よっ、と…♪ ふふ、あーあ、可愛い顔が台無しになっちゃって…♪」

霧島は、掴んでいた野分の頭を離すと、彼女の身体が地面に崩れ落ちる前に抱きかかえる。霧島の言う通り、野分の顔は台無しになってしまっていた。涙で、目元周りの化粧がグズグズになってしまっている。マスカラがとれ、アイラインが流されていく。だが、霧島はその涙を、迷うことなく舐め取ってやった。そして、邪悪さを隠さずに一しかし優しく、にっこりと笑う。

「でも、可愛いですね…♪」

そして、ベッドに腰掛けた自分のところへ抱き寄せると、そのまま背中に両手を回し、その両手で野分を抱きしめた。錯乱し、放心状態にも近い状況だった野分は、されるがままに抱き寄せられてしまう。

だから、しばらくして、はっと気付いた。ベッドに腰掛けた霧島に抱き寄せられるという事は、つまり、霧島の膝の上に両脚を広げて跨るような格好になるという事であり—自らの下半身と霧島の下半身が擦れ合う、という事でもあったのである。おしっこにまみれ、汚れた自らの身体が、高貴なご主人様の身体をも汚し、また、ベッドのシーツも汚していく。

「ご主人様…いけません…汚れちゃいます…ご主人様が、三榛の汚いので、汚れちゃう…」

弱々しく、呟くように言う野分。その声は鼻に詰まったような無様なもので、普段の凛々しいハスキーボイスの面影は何処にもない。その四肢も腱を切られたかのように力がなく、霧島から離れようとするも、何の成果もあげられない。

「いいんですよ…♪ 汚くなんか、ないんですからね。三榛は、綺麗ですよ…♪ そうじゃなきゃ、こんなになってないですよ…♪」

霧島の顔は、見えない。野分を正面から抱きしめて、鎖骨の上に顎を載せるような体勢になっているからだ。だから、声しかわからない。そしてその声は、優しくかった。慈母のように柔らかく、温かかった。

その優しい言葉と同時に、霧島は腰をくっつけてくる。野分の下腹部に、勃起したちんぽを、擦り付けてくる。熱く、硬く、そして大きく勃起したそのふたなりおちんぽは、百の言葉より雄弁だった。確かに、野分を汚いと思っていれば、とっくに萎えてしまっている筈の器官である。

「そーだよ、野分…♪ 野分は全然、汚くないよ…♪」

のわっち呼びをやめた舞風の声が、聞こえた。野分の背後、すぐ傍である。泣

きじゃくって自分を失っていた野分は、舞風が何処にいるのか、全く把握していなかった。こんなに近くにいるとは思わず、少し驚いた。だが、野分が本当に驚く事は、その直後に起きた。

べろり、と、下半身を誰かに舐められた。おしっこに汚れた雌穴、その周辺をの尻を、太腿を、舐められた。舞風である。舞風が、野分の身体を舐め—おしっこを、舐め取っているのだ。

「あらあら…♪ ふふ、微笑ましいですね…♪ ほら、三榛？ あなたのご主人様も、あなたの奴隷も…汚いなんて、思ってませんよ。私も、舞風さんも、三榛が大好きなんです。嫌ったりなんか、しません…♪」

そう言って、霧島は自ら後ろに倒れる。野分が霧島を押し倒すような格好になり、続いて、身体の上下を入れ替えた。

「ほら、舞風さんも手伝って…♪」

そして手早く、彼女の全身をベッドの上に乗せてしまう。二人がかりで手際よくやられてしまえば、野分は何も反応できなかった。ただでさえ、全身が弛緩しているような感覚に襲われているのである。自らが排泄した液体が、ご主人様の寝床を、シーツを汚していく事に罪悪感を覚えながら、しかし、されるがままに、仰向けにされてしまう。ついさっき、顔を埋めてオナった枕に頭を載せ、一方のご主人様は、その彼女に覆いかぶさるような姿勢となり、邪な笑顔で野分を見詰める。

「んーっ…♪ ふふっ、今日はこのまま、楽しんじゃいましょうか…♪」 ね、三榛…♪」

霧島は、自らのふたなりおちんぼを秘部に擦り付けながら、一方で、野分のその赤い唇に口付けた。いやらしいキスではない。舌を差し入れ、野分の唇を貪るような、そういうキスではなかった。

ただ、唇と唇が触れ合うだけのキス。親愛のキスであった。

「大好きですよ、三榛…♪」

その言葉は、野分には、嘘偽りのない真実として響いた。実際それは、本当なのだろう。自らへの愛を振りまいてくれる霧島があまりに眩しくて、野分はつい、目を逸らした。

「…です…」

「…え？」

そして、ぼそりと呟いた。霧島の唾液で湿った唇が、僅かに動く。その動きはあまりにも僅かで、音量は、呼吸にすらかき消されそうなほど小さかった。故に、霧島も思わず、聞き返してしまった。

「三榛も、ご主人様が…之白が、好きです…大好きです。お慕い申し上げて、います…之白は、三榛の全てです」

最初は、私も好きだと、そう言うだけのつもりだった。だが、止まらなくなってしまった。それだけ野分は、霧島を慕っていた。霧島を、愛していた。本人すら時々忘れそうになる下の名前を呼び、愛を告白する。

「三榛は、髪の毛一本まで全て、あなたのものです…之白のものです。死ねと言われたら、今すぐにでも死んでみせます。…だから…」

視線を戻し、霧島の顔を正面から見据えた野分が、両手を上に伸ばす。それは何を思っただけの事だったか、自分にも判らなかつた。抱きしめるためでもない。霧島の頬を撫でるためでもない。…手を伸ばせば、霧島という存在を何か、掴めるとも思ったのかも、しれない。

一方、その様子を見ていた舞風は、表情を崩さぬまま、声も立てず、しかし、静かに驚いていた。野分の言う事は、舞風が野分に対して思っている事、そのものだった。つい先日、首を絞められながら愛を交わした時も、そう思った。野分に死ねと言われたら、いつでも死ねると。歓喜をもって、死ねると。死ぬ瞬間に、絶頂を迎えるかもしれない。

「之白に嫌われたくないんです。之白に捨てられたら、三榛はもう、生きていきません。だから、だから…んんっ…」

告白が続く中、野分が言い淀んだ。言っていないかどうか迷ったのではない。だから、何なのか…自分でも、判らなかつたのだ。さっきも一度、「だから」で台詞が途切れたが一結局、この気持ちをどう表現すればいいか、判らなかつたのだ。

それを敏感に察した霧島は、もう一度、野分の唇を塞いだ。今度のそれは、唇を触れ合わせるだけの、生易しいキスではない。霧島は即座に、舌を差し入れた。野分の舌を絡め取り、舌同士をいやらしく、擦り合わせる。粘膜と粘膜が絡み合い、擦れ合い、性感と肉欲を煽る。

「じゅうっ♥ ちゅ、ちゅるっ、ちゅ、ちゅう、ちゅううっ…♥」

それは、野分の言葉に答える、霧島の行動だった。私は野分を、三榛を嫌っていないと、捨てる事などあり得ないと一自らの意思を、霧島は行動で示していた。最初こそ、されるがままにキスを受け入れていた野分も、徐々に、その行動へ応え始めた。自らもまた、積極的に舌を絡め、霧島の愛を受け入れ、また、霧島を愛する。

「んうううっ…!♥ じゅう、ちゅ、ちゅる、ちゅうっ…♥」

いやらしい水音が響く中、野分の喉から、くぐもった呻き声が漏れる。それは、悩ましい、喘ぎ声にも近いものだった。それも当然だったろう、霧島が腰を進め、

がちがちに勃起したふたなりちんぽを野分の膣内に侵入させたのだから。

ずぶぶ…♥ といういやらしい音と共に、ちんぽが呑み込まれていく。野分は、その快感にか、それとも歓喜にか、腰をくねらせ、しかし、霧島の唇に吸い付くのをやめない。野分からしてみれば、今こうして行われているキスこそが、霧島の愛を証明している。ならば、その愛の証明を離したくなかったのも、当然であった。

「んちゅ、ちゅるっ、ちゅ、ちゅううっ…♥ ん、んんっ…!♥」

そのキスを横から眺めていた舞風が、野分の鼻に手を伸ばす。霧島に目配せすると、霧島もまた、にやと笑い…その指は、そのまま鼻を摘まんで鼻孔を閉じ、鼻呼吸を封じてしまった。舞風が野分に何度もされてきた、窒息責めの一つだ。激しいディープキスをしている間は、まともに呼吸できず、酸欠気味になる。時折の鼻呼吸で息を継ぐしかないが、その鼻の穴までも塞がれてしまうと、実質、首を絞められているのと同じ結果を生む。

「じゅ、ちゅ、じゅるっ、ちゅうっ、ちゅ、ちゅううっ…!♥」

だが、野分はキスをやめない。どころか、より情熱的に、霧島の唇を求める。今や、主体的にディープキスをしているのは、霧島ではなかった。能動的にキスをしているのは、野分であった。野分は、霧島の愛の証明を離したくなかった。霧島の愛にすがりつこうと、霧島の唇に、無我夢中で吸い付いていた。霧島は、そんな野分を、優しく受け止めていた。腰を動かすのもやめ、ただ、野分のキスを受け入れている。

「じゅうっ、ちゅ、ちゅうっ♥ ちゅる、ちゅ、ちゅるる、ちゅうっ…!♥」

だが、それも長くは続かなかった。無論、舞風が野分の鼻を摘ままなければ、長く続いただろう。だが、今や彼女は一切の呼吸手段を奪われ、酸欠状態に陥りつつあった。顔が真っ赤になり、目が虚ろになる。酸素が足りなくなっている証拠だ。

だがそれでも、野分はキスをやめようとしなかった。キスをやめたら、その瞬間、霧島に捨てられるとでも思っているのだろうか。それとももう、酸欠で朦朧とした頭では、キスし続ける以外の選択肢が頭に浮かばないのだろうか。霧島が、小さく笑いながら顔を引き、唇を離す。合わせて、舞風も指を離した。

「ぶはあっつ!♥ はあっつ、はあっつ、はあっつ、はあっつ…!♥」

枕に後頭部を埋め、肩で息をする野分。新鮮な空気を肺が取り込み、酸素が脳に供給され、ある程度、理性的な思考を復活させる。だが同時に、一度酸欠状態になった事で、ある種のスイッチが入ってしまった。

肉便器としての、スイッチが。

「ご主人様…♥ ご主人様、ご主人様あ…♥ …っ、〜〜っ！♥」

野分の蕩けた瞳が、霧島を捉える。何度も呼ばれた霧島は、にこ、と笑うと、一度だけ大きく腰を動かした。ちんぽが抜ける直前まで腰を引くと、直後、一番奥目掛けて、思い切りちんぽを突き入れたのである。

「はーあーい…♥」

霧島が、くすくすと含み笑いを漏らす。野分はといえば、霧島ちんぽから不意に与えられた快感に背中を反らし、顎を上げて跳ねていた。イってしまったのだ。ご主人様とのキスで酸欠に追い込まれ、直後、子宮を叩かれて、イってしまったのである。

「すき、好きっ…♥ 好きです、ご主人様…♥ 虐めて…♥ お願いします、虐めてください…♥」

そう言いながら、野分は自らの両手で霧島の両の手首を掴む。野分の右手は霧島の左手首を、野分の左手は霧島の右手首を掴み…そして、霧島の両手を自らの首筋に導く。

野分は、この窒息プレイというものが、どうしてもなく好きだった。霧島が、イラマチオをこの上なく好むように、野分は窒息を、特に首絞めを好んだ。だからこそ、先程のキスによる酸欠で、再び発情してしまったのである。

「うふふっ…♥ 三榛はほんと、これ、好きですよね…♪」

本来はオスとして、メスの首を絞めるのが好きだった。メスの命を自らの手中にし、弄ぶ。苦しめられ、生死すらオスに握られて一しかし、メスはその苦悶と屈辱の中で、悦ぶ。そんな倒錯した関係が、野分はたまたまなく好きだった。

そして野分は、霧島に抱かれた時、知ったのだ。自分自身もまた、メスとして、苦悶と屈辱にまみれるのが好きなのだ。ご主人様に、生殺与奪の権利を…自らの命を差し出し、苦しめられ…その中で、あらゆる仮面を剥いだ、剥き出しの自分をご主人様の前に晒す。ご主人様は、剥き出しのメスの本性を見てそれを否定するどころか、ますます興奮し、メスを責め立てる。

それは、最高の幸せであった。

「が…！♥ か、はっ…！♥」

霧島が、ゆっくりと、しかし容赦なく、両手に力を籠める。霧島の首絞めは、本当に容赦がない。自分がオスの時でも、ここまでできているかどうか怪しいと、そんな風に考えた事もある。それぐらい、霧島は情け容赦なく、野分を責め立てる。

首絞めを始めたとほぼ同時、霧島は、腰も振り始めた。ちんぽが抜ける直前まで腰を引き、亀頭が子宮を叩くまで一ちんぽの根元が埋まるまで、突き入れる。



下に降りてきている子宮の口を亀頭がノックしたかと思えば、再びちんぽが抜ける直前まで腰が引かれ…再び、子宮がひしゃげるほどに激しく、突き入れる。

「か、ひっ…！♥ ぎ、ひっ…！♥」

そのたび、野分は敏感に反応する。おしっこと愛液が混ざりあい、どろどろになった膣内は、褰の一枚一枚が、霧島ちんぽにまわりついてくる。一方で、野分の首を絞める霧島の両手、その手首をそれぞれの手で掴んだ野分は、その手に力を籠める。

それは、霧島の手を引き剥がそうとするものではないし、一方で、自らの首筋に霧島の両手を押し付けるものでもない。最初、霧島に抱いて貰った日と同じだ。野分は、霧島の手にすがりついているのだ。自らの生殺与奪の権利を握り、また執行する、ご主人様の手に。私の全てはあなたのものですと告白しながら、すがりついているのである。

「ぶはあっ！♥ はあーっ、はあーっ、はあーっ…！♥」

野分の限界を悟った霧島の両手が緩む。同時に、腰の前後運動を一時的にやめる。根元まで突き入れた霧島ちんぽは、野分の子宮口とディープキスしたまま、腰が上下左右と動くに合わせて、子宮をこね回す。霧島が、木曾に散々やられたテクニックの一つだ。

一方、恍惚とした表情を浮かべながら呼吸する野分はもう、まともに物を考える能力を殆ど残していなかった。ご主人様のベッドの上でのオナニー、そこからご主人様と舞風に見られた時の精神的ダメージ、土下座中の失禁…短い時間の間に、あまりにも色々な事が起こり過ぎた。最後まで辛うじて残っていた理性も、この首絞めによる快楽が消し飛ばした。野分に今残っているのは、剥き出しとなったメスの本性、それだけであった。

「…♥」

多少の呼吸を野分に許した後、霧島の両手は再び、野分の首筋を締め付け始める。ちんぽの抽送も再開され…その直後、思いもしない事が起きた。舞風が、ベッドの背もたれ側に回り込んだかと思うと、その両手を霧島のそれに重ねたのだ。

「…い、き…っ！♥ か、ひっ…！♥」

舞風の手は、霧島の手を重ねられているだけである。霧島の手の上から力を入れて抑える、というような事はしていない。ただ、添えているだけだ。それでも、彼女の行為は二人を昂らせた。霧島は口角を吊り上げ、一方、野分は、瞳に狂ったような喜色を浮かべている。もう、本当に狂ってしまったのかも知れない。そう思わせるほどの壮絶な目をして、しかし、首絞めの快楽を享受していた。

「ぶはっ…！♥ はあー、はあーっ、はあーっ…♥」

再び手を緩め、また腰の動きも小休止に入れた時。霧島は必死に呼吸する野分から目を逸らし、舞風を見た。その目を見て、意味ありげに笑う。そして、自らの手をずらし、手のひらで舞風の手の甲を包むと、その舞風の手を、野分の首筋に押し付けた。

先程から変わらず、愉快そうな、無邪気そうな笑顔を浮かべていた舞風も、これには驚いたらしい。目を剥いて、自らの両手を見やる。舞風の手は、野分の首筋を直接包み—その手を霧島の手が包み、更に、霧島の手首を、野分が掴んでいる。

「…♥」

この上なく、倒錯した状況だった。この時初めて、舞風の笑顔が変化した。無邪気で無垢な笑顔が、鳴りを潜めた。その整った顔へ代わりに表出したのは、メスの顔である。発情した、メスの顔だ。オスの顔では、なかった。

「…ころ、して…♥ 殺して、ください…♥ ご主人様…舞風…♥ 私を、殺して…♥ 殺して、ころして…♥」

その自らの首筋に手を添えた二人に、野分が、息も絶え絶えにねだる。その言葉に、舞風の身体が跳ねた。びくっ、と…まるで、ちんばでも突き入れられたこのように。頬はすっかり紅潮し、視線は熱を帯びて、無様におねだりする野分を凝視している。

霧島は知らなかったし、野分自身も気付いているかどうか怪しかったが一何せ、もう氣息奄々といった風である—それは、普段、舞風が野分にねだっている事だった。野分に首を絞められるたび、舞風はそう言って、野分に殺してくれとねだった。ついこの間のセックスの時も、絞められる合間にそう、ねだったのだ。

それを今、野分がねだっている。殺してくれと。あなたに愛されながら殺される事こそ、自分の幸せだと…ご主人様にも、舞風にも、そうねだったのだ。

「一っ！♥ かひっ、ひぎっ…！♥」

霧島が、両手に力を入れる。彼女の両手は舞風の両手を押し、野分の首を絞めた。野分の喉から、靴の裏に潰された蛙のような、無様で惨めな音が漏れてくる。

明らかに野分は、この状況に悦んでいた。舞風と霧島、大好きな肉便器とご主人様に、二重に首を絞められるという状況。同時に責め立てられ、同時に、自らの本性を見せつける状況。最早、理性というものを完全に失った野分にとって、それは、快樂のあまり気が狂うような体験であった。

「うふふっ…♥ すーごいですね…♥ 三棒ったら、すっごい締め付けて…だつていうのに、ナカがうねってるみたい♥ こんな、すぐイっちゃいますよ…

♥」

激しく奥を突き上げながら、首を絞めながら、興奮した様子の霧島が言う。その言葉はもう、野分には届いていない。その恍惚とした表情を一目見れば、酸欠が相当進んでいる事が判る。口を開け、舌を突き出し、口端から涎を垂らしーしかし、狂気を孕んだ目だけが、ぎょろりと上を向いていた。

実際、野分は既に、無音の世界にいた。首を絞められると陥る、音のない世界だ。やがて視界がぼやけ、愛しい霧島の顔も、舞風の顔も、ぼんやりとしか見えなくなる。のっぺらぼうのようにしか、見えなくなる。

だがそれでも、自らの愛しい人に違いなかった。大好きなご主人様。大好きな、肉便器。その両者に今、首を絞められ、野分は死のうとしている。窒息させられ、あの世に送られようとしている。

なんと幸せなのだろう。ご主人様に殺されるだけで、死にながらイけるぐらい幸せだというのに一舞風にまで、殺して貰えるなんて。大好きな肉便器にも、殺して貰えるなんて。

死んだら、どうなるだろう。

きっとご主人様は、もう一度、三榛を使ってくれるだろう。三榛の死体を。死んだばかりでまだ温かく、しかしもう、ちんぽを締め付ける事のない、ゆるゆる、ドロドロのオナホールを。意思のない、本物のダッチワイフを。

その後は、どうなるだろうか？

ふと、頭に舞風の顔が浮かんだ。艶やかな金髪によく似合う、笑顔の素敵、肉便器。三榛の、大事な人。

直後、場面が移り変わり、首を絞められながら霧島に犯される、舞風の姿が浮かんだ。彼女は、野分の死体の傍で犯されていた。舞風は、横に並べられた三榛の手を握っていた。霧島は首を絞める手を緩めず、ただひたすらに、舞風の便器穴を使い続ける。

やがて…霧島が舞風の膣内に精を吐き出すとほぼ同時、舞風の身体が跳ねたかと思うと、それっきり、脱力して動かなくなった。死んだのだ。白目を剥き、口を開き、舌を突き出して一幸せと快楽に包まれたまま、死んだのである。三榛の横で。大好きなご主人様の横で、仲良く、一緒に。

「~~~~~っっっ！！♥♥♥」

視点が俯瞰に切り替わり、霧島の寝室に仲よく、二人の死体が転がっている光景を見たその瞬間。ご主人様と肉便器が、ご主人様のご主人様によって、本物のダッチワイフに作り変えられた光景を見た、その瞬間。

野分は現実に戻され、背筋だけで背中を反らし、激しく痙攣しながら絶頂

を迎えた。ほぼ同時に、霧島はその手を緩め、一方で膣内に射精していたのだが、野分はそれに気付かなかった。自分が何故イったのか、それすら理解できなかった。ただただ、押し寄せてくる悦楽に身を任せ、共に流されていくだけだった。

「…♥」

しばらくの間、あるで悪霊にでもとりつかれたかのように痙攣していた野分は、やがてその動きを止めた。白目を剥き、舌を口外に放り出し、涎を垂らしたまま—しかし、幸せそうに、泡を吹いていた。

霧島は上体を折ると、そんな野分に、そっと口付けた。唇に触れるだけの、優しいキスである。しかし、その優しいキスとは裏腹に、彼女の浮かべた笑顔は、残忍なものであった。

今日という日はまだ、半分も過ぎていない。

この宴はまだ、始まったばかりであった。